

JAPAN URBAN DESIGN
INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷2-35-10
本郷瀬川ビル 〒113-0033

TELEPHONE 03-3812-6664

FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI

061

20.JULY
2001

特集
「私の描く21世紀の生活と住環境」

発行者：都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

- 特集：私の描く21世紀の生活と住環境
- 作品A「GREEN CIRCLE on yamanote Line」… 2
- 作品B「・・・日本橋上高速道路の地下化」… 4
- 作品C「・・・新しいデザインコンセプト」… 6
- 作品D「・・・農住・林間都市のユビ7が…」… 7
- 作品E「舟入川プロジェクト」… 8
- 作品F「横浜・山下埠頭エポカ」… 9
- 作品G「横浜・都心型住居プロジェクト」… 10
- 作品H「横浜・山下公園海側への拡張A案」… 11
- 作品I「歩道橋のデザイン」… 12
- 作品J「横浜・関内駅「ムナト」」… 13
- 作品K「TA JU-RYOKU」… 14
- 作品L「南海大地震に備えたまちづくり」… 15
- 作品M「Communities Hub」… 16
- 作品N「高知空港プロジェクト」… 17
- 作品O「横浜・市庁舎計画-A案」… 18
- 作品P「横浜・鉄道高架再利用計画」… 19
- 作品Q「横浜・横浜港都市軸+象の鼻軸線広場」… 20
- 第11期定例総会… 22

特集：「私の描く21世紀の生活と住環境」

広報出版委員会・JUDI編集部では、都市環境デザイン会議の活性化のために、一人でも多くの会員が参加できる活動の一つとして、本年度、「会員が参加して作り上げる誌面づくり」を年間テーマに、「21世紀の都市・環境を考える」という大きな枠組みの中で進めることにしました。

その第一弾として「私の描く21世紀の生活と住環境」を課題として会員からの作品募集を行いました。堅苦しい議論や真面目な都市像だけでなく、美しい夢や憧れでも結構。若い会員にも奮って応募してほしいと、「JUDI-60号」でお知らせしたほか、担当の中嶋猛夫会員がいろいろなツテを通じて応募を呼びかけました。その結果、応募総数が17とまずまずの反応がありました。

提出品はA3サイズ2枚としたため、展示用のパネルの制作等は中嶋猛夫会員と白濱力会員が手分けをして行いました。

応募作品は、「JUDI創立10周年記念・2001年特別企画」として、2001年7月14日(土)のJUDI総会会場に展示し、総会参加者による好感度投票と一言評価の記入をお願いしました。

本号では、応募作品の全てを好感度・一言評価を添えて掲載します。好感度はポストイットの色で「優」「良」「可」を判定しました。数字は投票総数です。なお作品によっては一言評価のないものもあります。

(編集担当： 白濱力 中嶋猛夫 松村みち子)



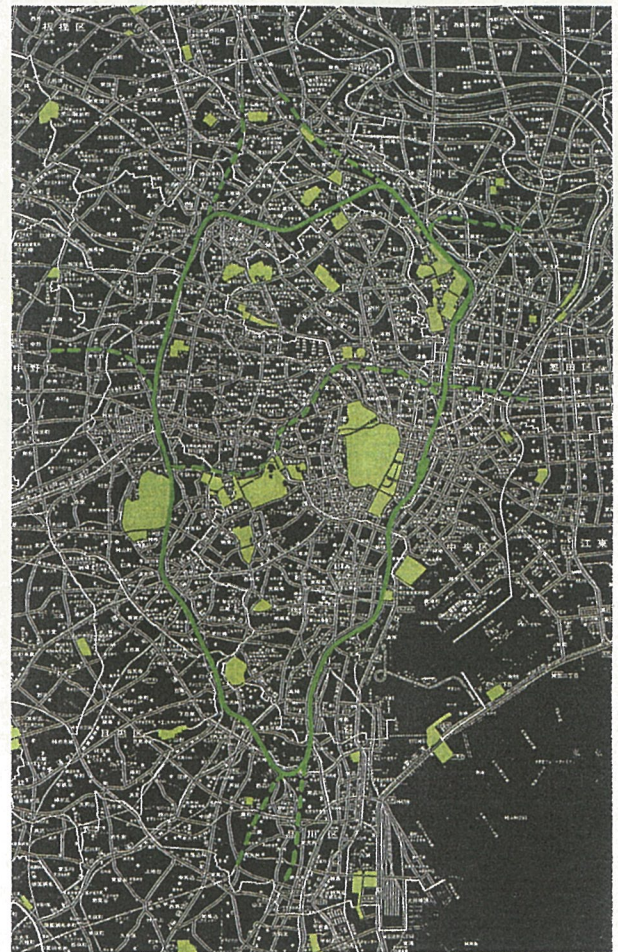
写真は総会会場におけるパネルの展示風景

GREEN CIRCLE on Yamanote Line

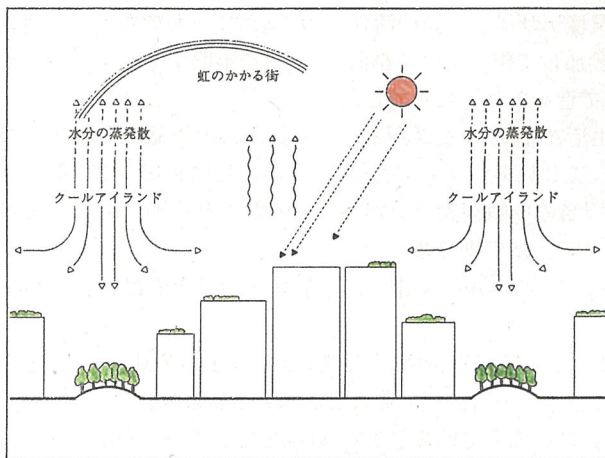
東京での「ヒートアイランド化」は近年とみに進みつつある。これを助長しているのは無機的材料を使った人工物の増加と、それに伴うグリーン・ストックの減少、更に外気温が高いことからくる空調の常時利用が悪循環を増幅している。真夏の都市の気温を2～3℃下げる。そのことによって削減できる電力は大都市・東京全体を考えると膨大なものとなる。そして電気量の減少は地球温暖化に対しても有効である。また地盤を緑化することによって地中や植物に水が貯えられ、そのことは都市の「砂漠化」にも歯止めがかけられるだろう。

東京を循環する山手線を地下化することによって生まれた地上部の円環緑地「GREEN CIRCLE」はそれ以外にも様々な効果を引き起こす。一つは都内に点在する公園緑地を結びつけることによる生態系のネットワークの形成、都市の中での人間と小鳥、小動物等との共生が可能になるかもしれない。また一つは降雨時の雨水を一時貯留し、地中に戻すことによる都市型洪水の緩和なども可能だろう。

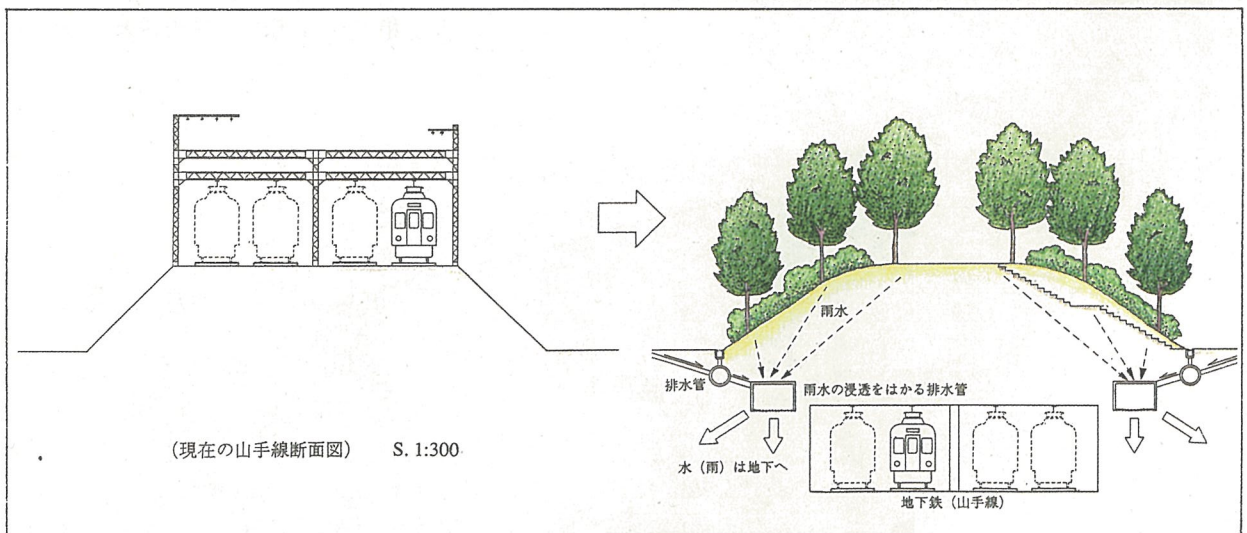
そして何よりもこの「GREEN CIRCLE」は都民にとって大都市・東京の最も身近な憩いの場となる。



都内に点在する公園、緑地とのネットワーク化による生態系の形成



緑被率を50%にすると東京の真夏の最高気温は3℃程度低下する



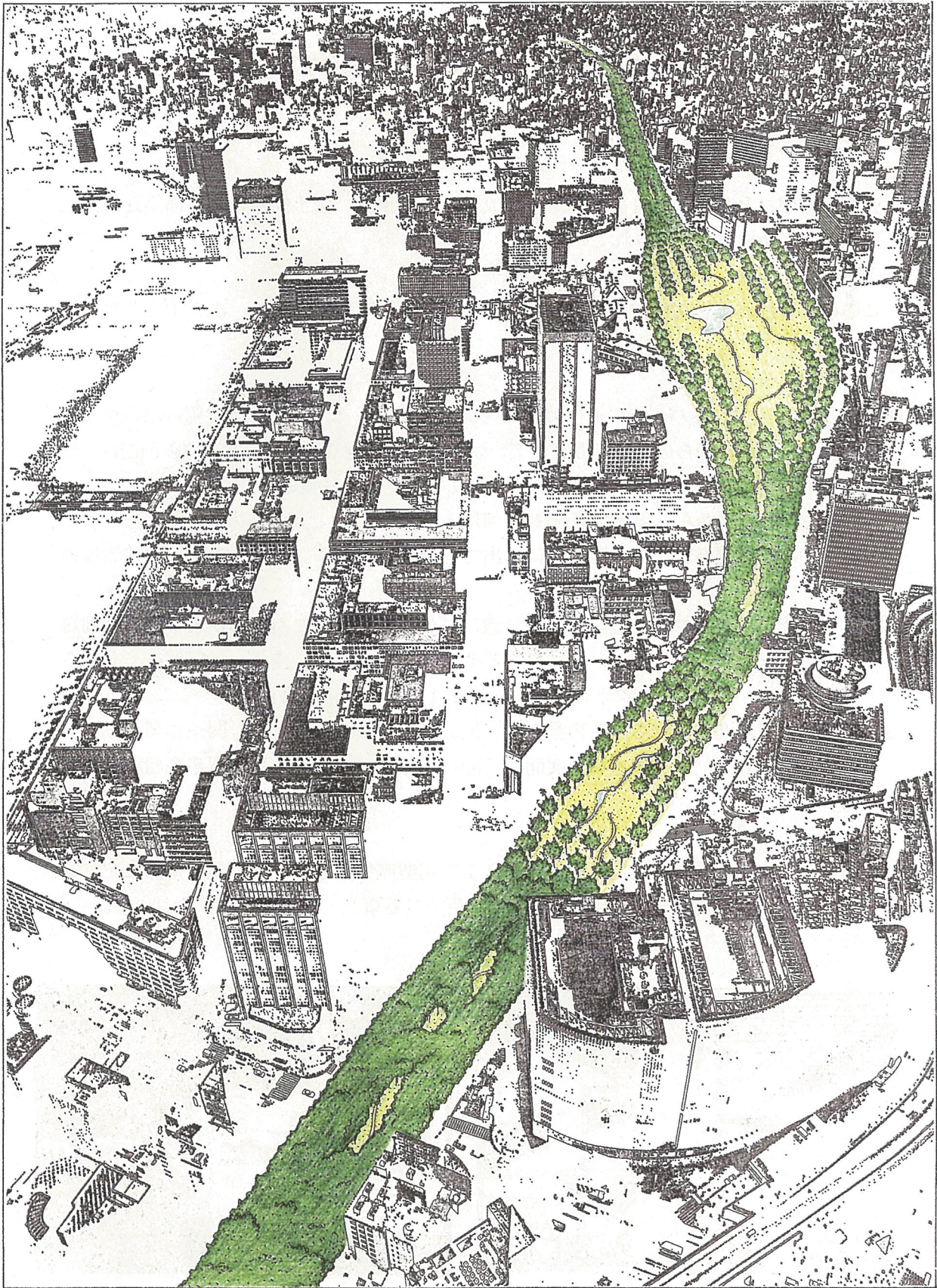
「都市の森」—— 降雨の一時貯留、地下へ

作品A

表題：「GREEN CIRCLE on Yamanote Line」
(山手線地下化・地上緑化)

所属：SESTA DESIGN

氏名：清水泰博



好感度：「優」7、「良」1、「可」0

一言評価：*こうなれば東京もよくなる。

*21世紀のモデル都市像、実現不可能ではない。

*事業費の捻出方法までは是非教えて欲しい。

*良いコンセプトだが、スケールがケチっぽい。もっと大きく。

タイトル

景気回復と21世紀型社会対応につながる日本橋上高速道路の地下化

提案の背景と骨子

背景

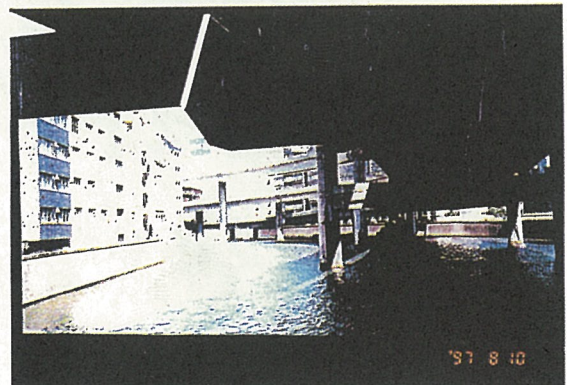
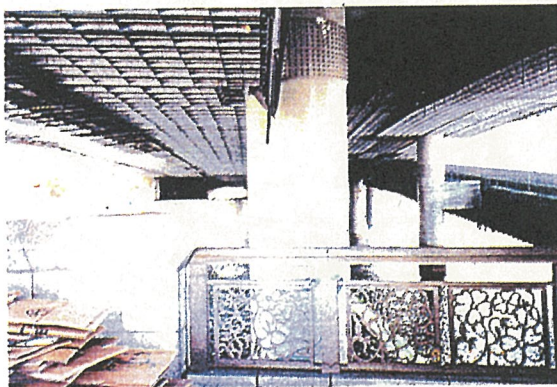
- ・日本橋を題材として、現首都高速道路の改善へ、東京都、国土交通省、首都高速道路公団の前向きな検討開始がされている背景がある。

骨子

- ・この事業の景観的・文化的な意義以外に波及効果・経済的効果など、次のような可能性があろう。

1. 通信(IT・光ファイバー等の通信幹線)や水道・電力等ライフラインの幹線併設の可能性をふくめたこれからの都市基盤として、耐震・防災性能を確保した整備(地下化)は、国際都市の基盤として不可欠となる。－「21世紀型都市基盤策」
2. 建設を環境破壊から、環境回復(景観・河川・空気・緑化)と安全性の確保の手段として変換する技術開発となり、国際的に輸出できる技術となる。－「21世紀型建設技術策」
3. 従来の経済を支えてきた建設業が、急激にダウンしたことにも原因がある不況の問題を、新たな需要が起こるとともに、ゆるやかな新たな変換に変え、景気回復しながらのリーディングプロジェクトになる。－「21世紀型経済活性化策」
4. 市民や住民に迎え入れられる事業として位置づけられるとともに、関連企業のみならず地域や受益者と連携する事業展開の可能性はある。－「21世紀型事業組織の展開策」

したがって、前段の景観や文化的意義－「21世紀型歴史・文化の継承策」に以上を含めて、大きくは5つの意義をもつ極めて展開に注目できる事業として位置づけられよう。

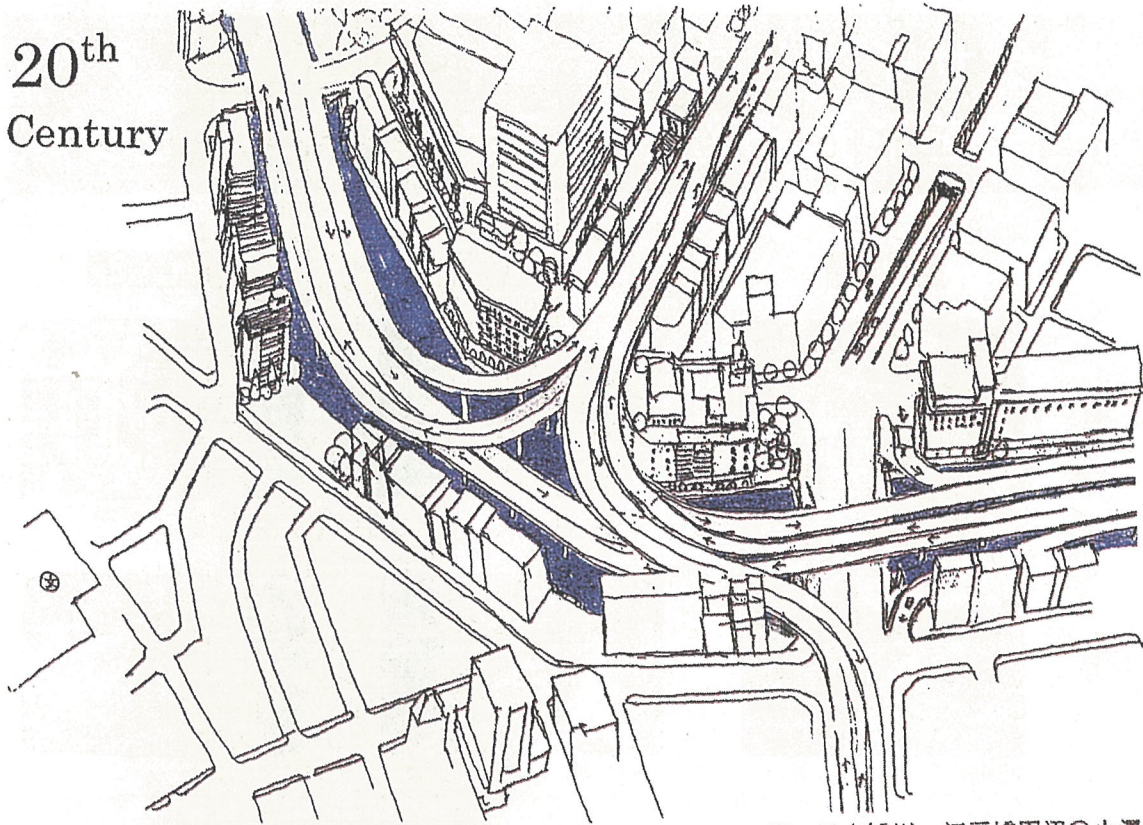


作品B

表題：「景気回復と21世紀型社会対応につながる日本橋上高速道路の地下化」

所属：宮城大学
氏名：小澤尚

20th
Century

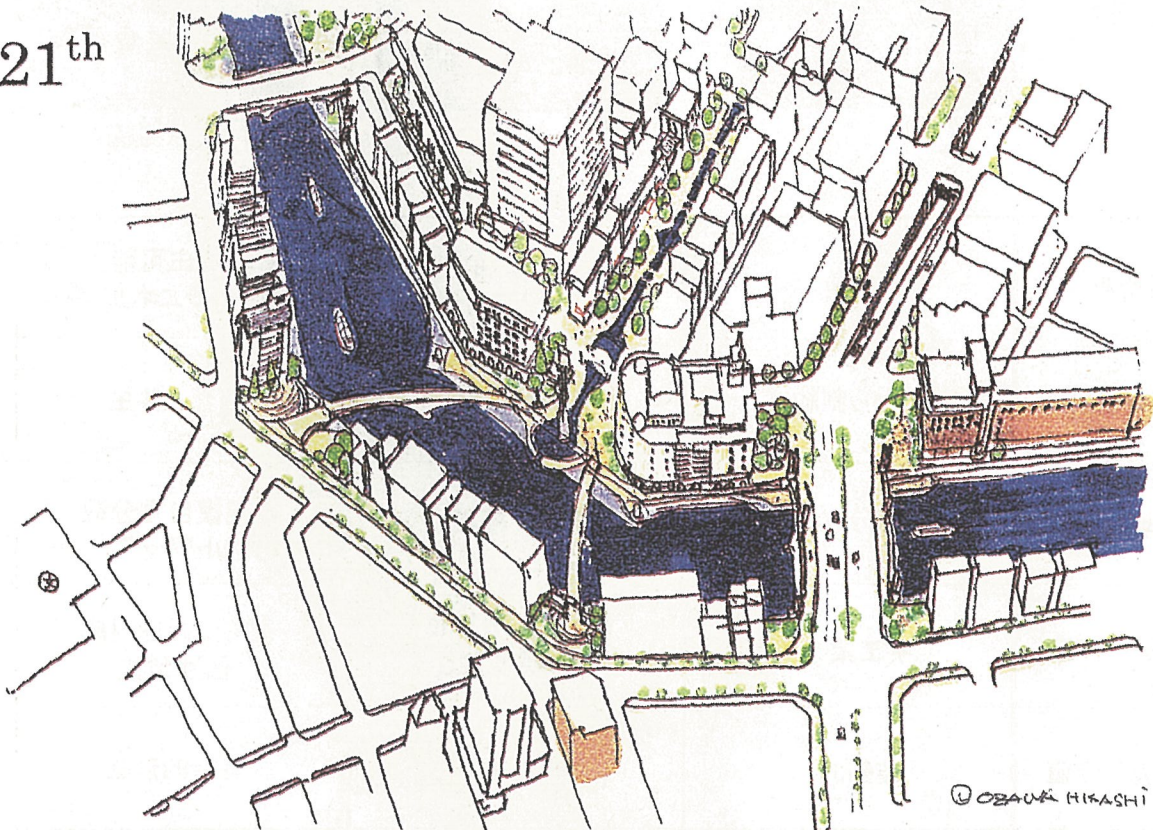


都市基盤の震耐地下整備の意義一

例一日本橋川・江戸橋周辺©小澤尚

1111

21th



好感度：「優」6、「良」3、「可」1

一言評価：*大賛成。

* 仲々面白い話です。

* 川のデザインは今様のテーマ

* すぐにでも実現させたい。

* 首都高全体をなくすことも含めて考えるべき。

* 1・0年前から提案されています。

環境デザインとは 21世紀を形造る新しいデザインコンセプト

	近世	近代	21世紀
住居	 <p>宮殿</p>	 <p>スラム街</p>	 <p>エコジカル・ソーラーハウス</p>
河川	 <p>自然の小川</p>	 <p>汚染された川</p>	 <p>親しまれる川</p>
都市	 <p>江戸の市街</p>	 <p>現在の東京</p>	 <p>安全で美しく潤いがある サステイナブルな多自然型都市</p>

エネルギー	薪、木炭	石炭、石油	再生可能 クリーンエネルギー
自然対応	自然から制約	自然を克服	自然と共生
社会システム	異種分立	大規模一極集中	小規模自立分散 ネットワーク
生産方法	手工業	画一化、機械化 大量生産	地域、個性対応 個別製作
造形価値	装飾的	単純化	有機的形狀

作品C 表題：「環境デザインとは21世紀を
形造る新しいデザインコンセプト」

所属：女子美術大学
氏名：中嶋猛夫

好感度：「優」4、「良」2、「可」0
一言評価：*新鮮な切り口です。

- *わかり易くまとめられている。
- *学生に見せたい。
- *21世紀の事例がコンベンショナルなものを大スケールで。

JUDI・私の描く21世紀の生活と住環境 今なお「農住・林間都市」のユートピアが思い浮かぶ...

新世紀の変わり目には、誰も未来に向けて大きな“夢”を膨らませるものだ。確かに、今までの“新世紀の変わり目”はそうであり、科学技術の飛躍的な発展は、それを可能にしてきた。

しかし、20世紀後半に見えてきた公害発生・環境破壊は、人類とともに宇宙船“地球号”に乗り合わせた多種多様な生物との共存を不可能にするような危機的状況を招いてしまった。

実際、英国でさえ近代的な「都市計画」の理念が確立していなかった今から百年前に、社会改革の“発明”を夢見る初老の速記者E. ハワード（1850年生まれ）が著した本『明日／真の改革へ至る平和な道』の中で提唱された「田園都市」は、もはや古びた概念と化してしまっただろうか？ 否。依然として、私達が思い描く「夢の生活と住環境／ユートピア」たり得るのではなからうか？



JUDI・私の描く21世紀の生活と住環境
今なお「農住・林間都市」のユートピアが思い浮かぶ...

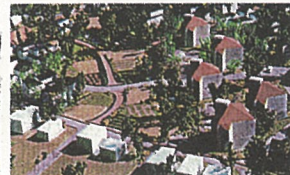


私は「自然物である人類は、自然が大好きで、結局、自然とともにしか生きられないのではないか」と疑っている。

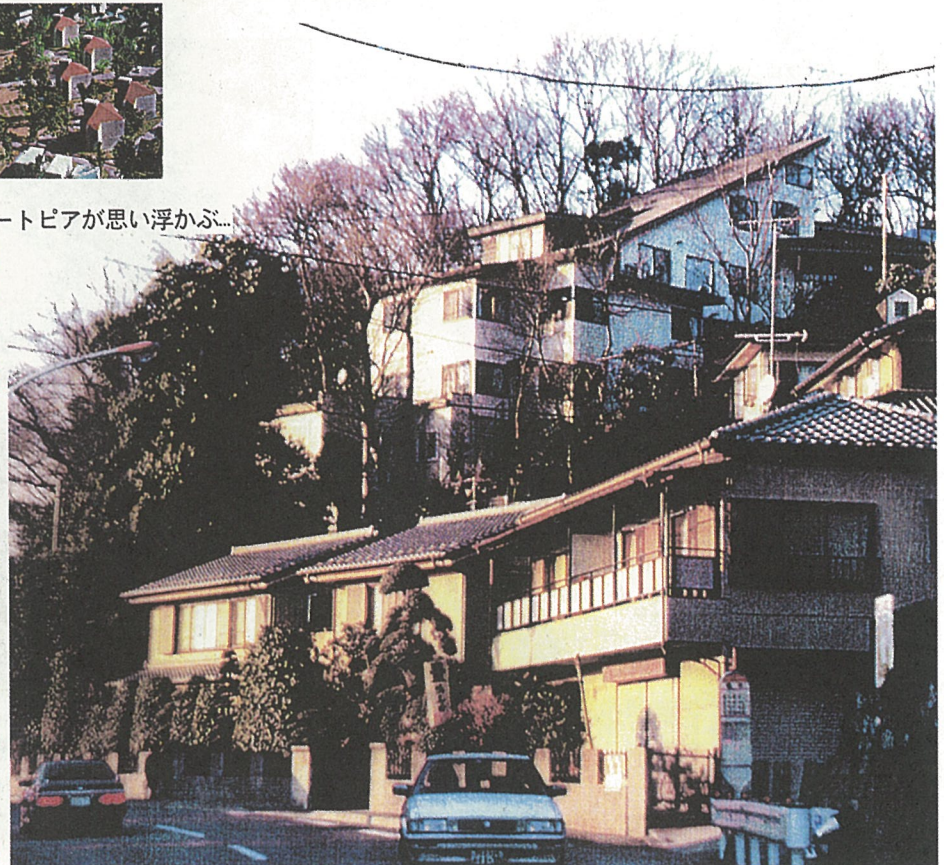
それ故に、今なお「農住・林間都市」こそ“ユートピア”だとこだわる。

そんなことから、私は「21世紀は、人類と自然環境が本当の意味で“共生”していくことができることを実証する」ような時代であって欲しいと願っている。

この一枚の写真こそ、私が大好きな景色であり、私の思いを表している。



JUDI・私の描く21世紀の生活と住環境
今なお「農住・林間都市」のユートピアが思い浮かぶ...



成瀬 恵宏 (都市設計工房)

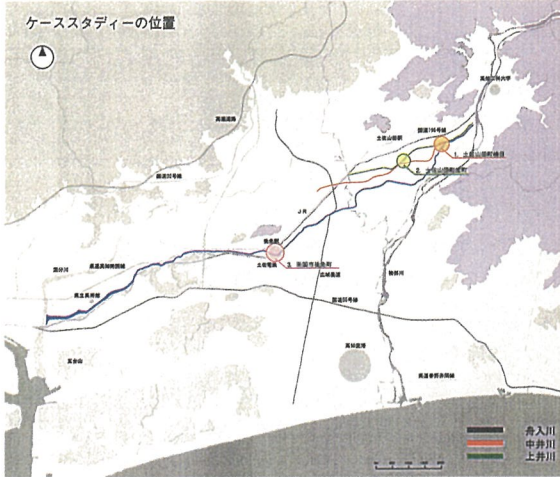
作品D 表題：「今なお『農住・林間都市』のユートピアが思い浮かぶ・・・」

所属：都市計画工房
氏名：成瀬恵宏

好感度：「優」4、「良」1、「可」0
一言評価：*都市スケールでの位置づけと「都市計画論」が必要か。

舟入川プロジェクト

氏名 鍛冶田 園子 吉良 有可
辻本 一英 増本 早百合



舟入川プロジェクトは、香美郡土佐山田町にある山田堰から高知市碓氷の国分川との合流地点へと流れる舟入川とその分流入井川、中井川の3河川を中心とする河川の景観設計を目的とする。
舟入川以下3河川は藩政時代、野中兼山により物部川より広大な地域への灌漑用水確保を目的として、農業用取水堰である山田堰構築と共に整備された。また舟入川は、城下町と香美郡農地との経済圏構成の一環としての水上輸送手段として活用されていた。しかし現在、水上輸送の必要がなくなり灌漑用水のみを目的とする川になり、近年3河川は氾濫防止の為にコンクリート3面張りで行われ、人々の距離を遠ざける風貌の川となった。
川とは本来、人々が水と親しめる絶好の場所であった。実際に20年ほど前までは、子供達が川に入り遊ぶ姿が当然のように見受けられた。しかし現在、川で遊ぶ子供どころか誰も寄り付かない川となり、そして川に沿って歩くことさえも困難な状態になっている。この状態を打開すべく我々は、川の存在をアピールし、人々に川に興味を持たせ、そして川に人が集まる事をコンセプトに掲げ、魅力ある河川の景観設計に取り組みだ。

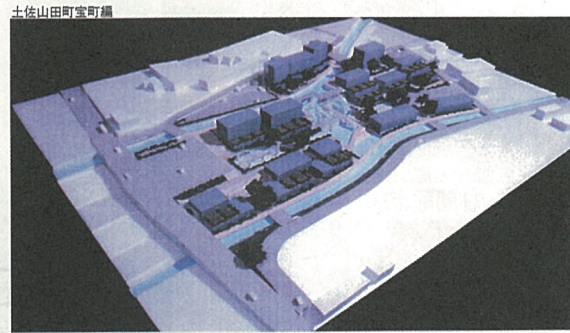
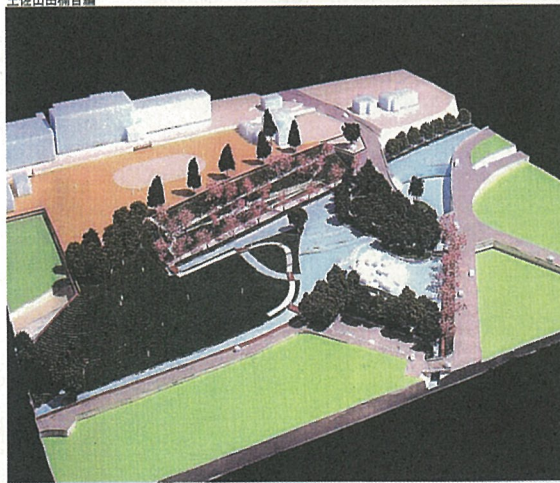


- 土佐山田町編目録
 - A 山田分水
物部川の山田堰からのびた一本の川が三本の川（写真右より舟入川、中井川、上井川）に分岐する地点であるが三河川共にコンクリート三面張りで固められており、灌漑用水という機能だけを目的とする川であるという意図がうかがえる。
 - B 納目小学校と上井川との境界
川との接触を拒むかのように高さ7mの壁面が存在する。しかも上井川はこの付近では木々や雑草に覆われて、川に沿って歩くことさえもできない状態が約1km続いている。上井川の存在感さえも危ぶまれる状態となっている。
- 土佐山田町室町編
この住宅地は上井川と中井川に挟まれた、最大高低差9mという特殊な傾斜地形である。しかしその特性を生かしておらず、川はコンクリートの三面張りで魅力のない空間が延々と続いている。周囲の地域は閑静で日中でも活性がなく、どここなく寂しい感じがする。
- 南国市後免町編
A 舟入川と用水路との分岐点
コンクリートの三面張りで分岐点であるという特性が活かされておらず全く魅力のない川となっている。また、川沿いの道は小学生の通学路となっているにもかかわらず、車道と歩道が別れておらず危険である。
- B オガタマの木
川沿いにある民家の敷地内に後免町の天然記念物であるオガタマの木がある。川と無関係にひっそりとたたずんでいる。
- C 舟入川に架かる橋
橋は民家専用の駐車場として利用されている物が多い。住民にとっては便利だが景観を著しく損ねている。

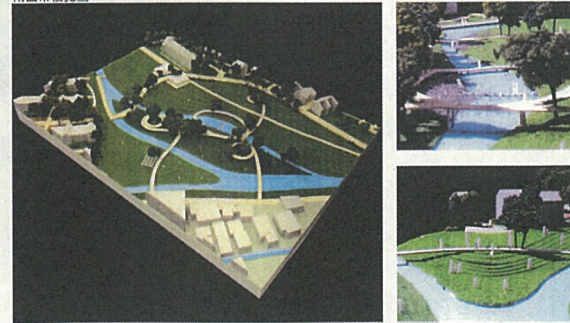
舟入川プロジェクト

高知工科大学
氏名 鍛冶田園子 吉良有可
辻本一英 増本早百合

土佐山田町編目録



南国市後免編



作品E 表題：「舟入川プロジェクト」

所属：高知工科大学
氏名：辻本一英

好感度：「優」3、「良」0、「可」0
一言評価：なし

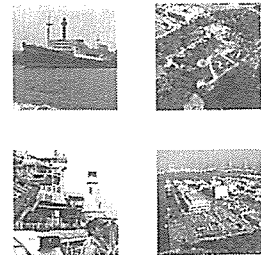
03

山下埠頭エコパーク
Kanmatal Urban Double Ring
Project #03

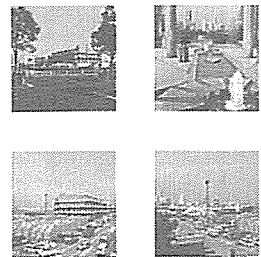
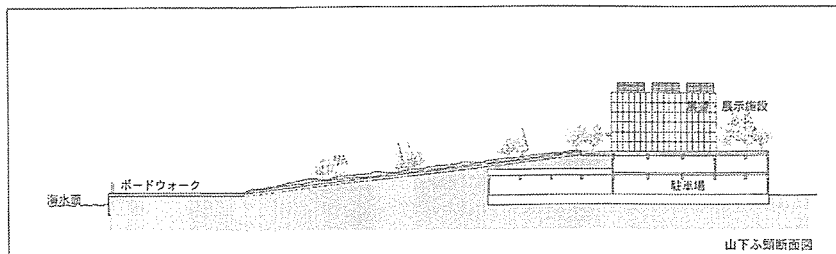


3. 山下埠頭エコパーク

- ・横浜港のウォーターフロント計画の一端として緑化し、みなとみらい地区から山下公園まで続く緑の結線の延長となる。
 - ・市庁舎移転に関連して、横浜公園の中に市庁舎を建設する場合公園の大替地として緑化する。
 - ・横浜港を一望できるように、丘状の公園とし、空船ターミナル、山下公園方向から見たときの背後の倉庫群の目隠しの役割を果たす。
 - ・複数のガラスブロックの中に、展望／展示／市場的な施設を入れる。
 - ・建物の屋上にソーラーパネルを設置し環境に対応した、エコロジカルな公園とする。
 - ・1階部分におよそ500台分の駐車場を設ける。
- 関内地区の周辺に駐車場を設け、当地区を歩いて回遊する街とする考え。



現況写真



現況写真

作品F

表題：「横浜・山下埠頭エコパーク」

所属：神奈川大学大学院
氏名：堀内寛晃、清水玲、
永田誠、島尾真亮

好感度：「優」2、「良」3、「可」0

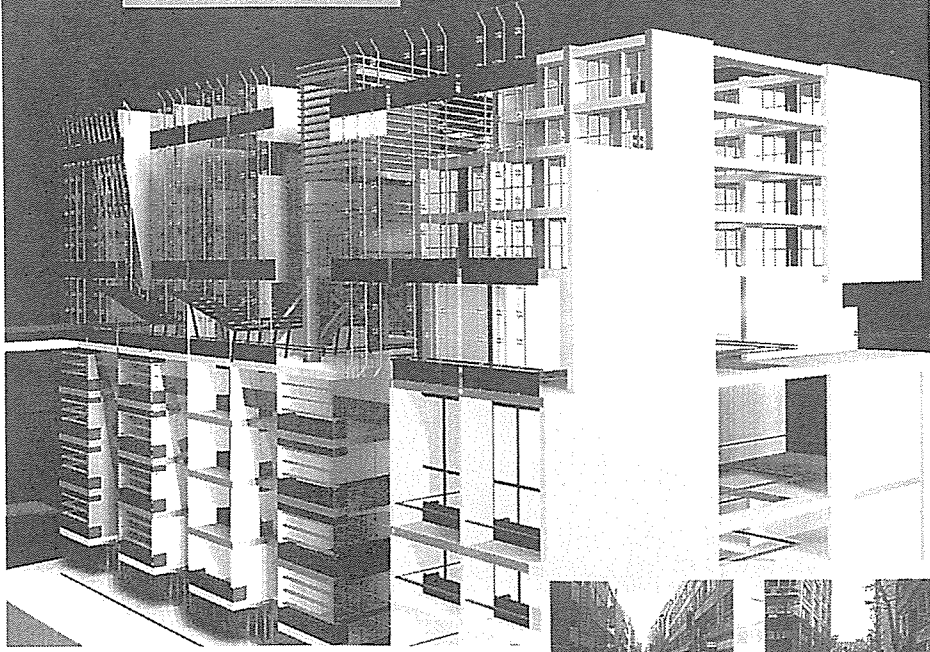
一言評価：* 熱き思いが伝わってきます。

* のんびりした快い空間。

* 道が定規で描いたような直線が気になる。

10

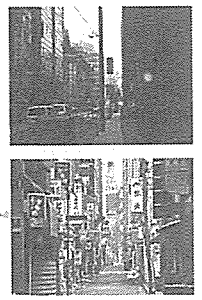
都心型住居地区
Kannai Urban Double Ring
Project #01



現況
路多だがにぎわいのある街並となっている

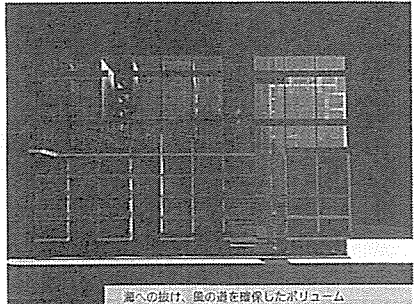
- 都心型住居地区
／通り抜け道の提案
- 近年の都心型住居傾向の急増により、都心の集積地区、高層地区でも積極的な集合住宅（マンション）建設の動きが見られる。
- 地価の高い場所や、開発ポテンシャルの低い所のみならず、都心の一等地からすぐ隣へ入ったような場所にも積極的に進出している。
- ゴミの問題や小中学校区の問題など、住環境的に様々な問題が生じているのが現状である。
- 都市景観が、市街地環境的にも解決すべき要素が見られる。
- そのような問題を解決するために次のような提案をする。

海／都に近い場所の特性を活かし海
の方向へ抜けるボリューム配置をする。
中庭や底層のスペースをとおして、
差通り／貫通りを結び抜け道をつくる。
階層バルコニー等が街路へ突き出さ
ようにし、街並の潤いが増えるように
する。
テラス的屋上庭園を、居住部分／商
務商業部分との緩衝地とする。
将来的には屋上庭園同士を結び、ス
カイウェイネットワークを形成する

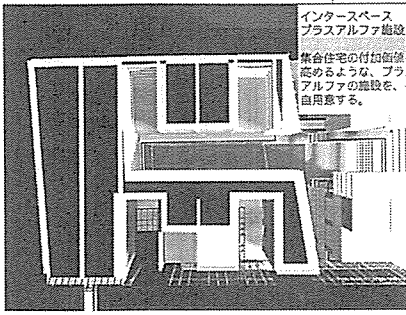


通り抜け道を設置した下層階は景観・商業スペース
通り抜け道によって採光・通風が確保される上層部の居住スペース

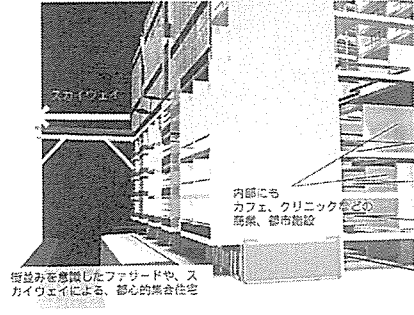
内庭が立体的につながることで出来てゆく、多層的街並み



海への抜け、風の流れを確保したボリューム



インテースペース
プラスアルファ施設
集合住宅の付加価値を
高めるような、プラス
アルファの施設を、各
自用意する。



スカイウェイ
内部にも
カフェ、クリニックなどの
商業、都市施設
街並みを意識したファサードや、ス
カイウェイによる、都心の集合住宅

■マンション住民による街づくり
インタースペース付き共同住宅

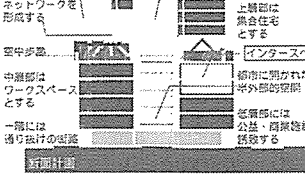
集合住宅の提案としては次のような提案をする

1. かならず公共スペースを設ける。
例えばスポーツジム、
見聞施設
地域の集金施設
など。
2. 必ず近隣の集合住宅と異なった種類のスペースとする。
3. 各集合住宅共同で、それらスペースの共同管理運営会社を設立する。
(各々のマンションの管理組合が主体となる。
PM、RM等の組織でもよい。)

収益は各マンションの維持・管理・建て替え等に
使われる。

建て替え時には、組織内の他集合住宅の空室を優
先的に使用できる。

マンションの維持管理組織を有効に使った、
「マンション住民による街づくり」
を提案する。



街並の賑わいを確保し、街並を形成するために
密な居住型地区計画制度を利用し、
新線敷を運用除外とする。
そのかわりに影響を受ける採光、通風のために
通り抜け道、屋上テラスを誘導する。



作品G 表題：「横浜・都心型住居プロジェクト」
所属：神奈川大学大学院 好感度：「優」2、「良」2、「可」1
氏名：堀内寛晃、清水玲、一言評価：*仲々楽しい提案。実現したいプロジェクト。
永田誠、島尾真亮 *良いのか悪いのか。21世紀モダンの発展形？
*自らの中に常に花・緑・水との共存を計る生活への知恵を！

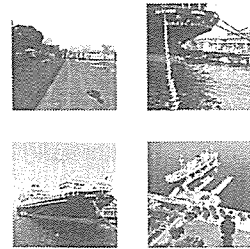
02

山下公園海側への拡張 Kan'nai Urban Double Ring Project #02

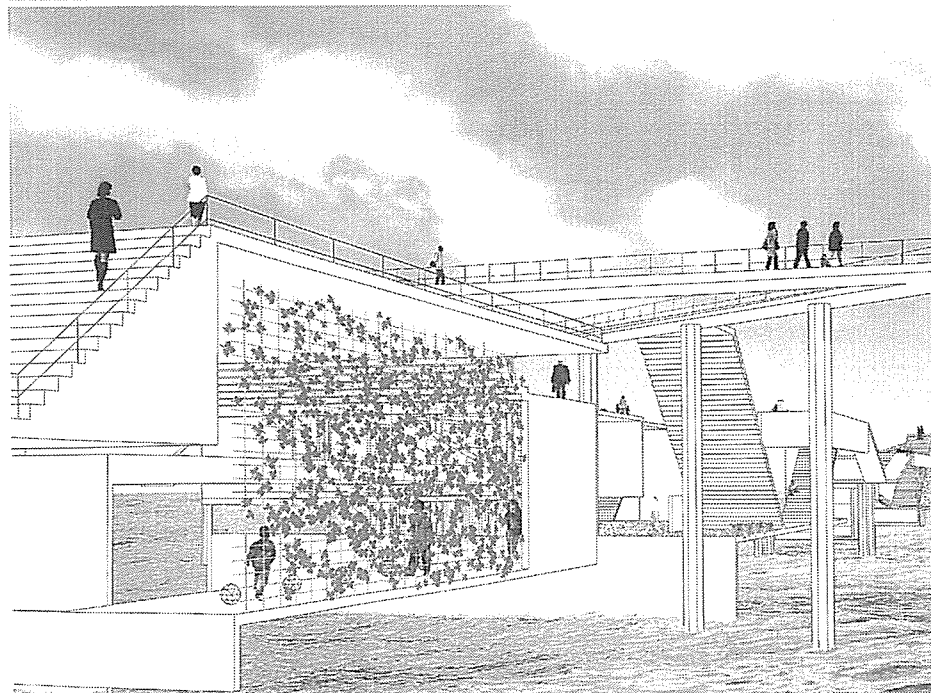


山下公園海への拡張

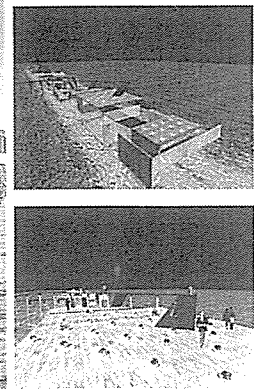
- ・臨海幹線が山下公園に沿って海底に建設される。
- ・その計画に合わせて、山下公園の海への拡張計画があるが、単に陸地を拡張するのではなく新しいワークフロント計画として提案する。
- 水と陸地が入り組みながら変化のある運河的なスペースを形成する。
- ・運河的スペースには船が浮かび、橋が架がり、親水性の高い市民の楽しめるスペースにする。
- 山下公園は関東大震災の復興事業の一環として、震災により生じたレンガ、焼土などを処理するための整備された場所である。拡張する部分も震災の記憶を呼び覚ます場所として計画する。
- ・当時の写真や記録文庫などを壁が展示し、それに関連したモニュメントやストリートファニチャーを配置する。



現況写真



様々なレベルにスラブ・壁を配置し、それら水（海面）が覆う。潮の干満により、水に埋もれる場所もあれば、そのままの場所もある。現況の山下公園からの海への眺望は確保する。スラブ・壁・天井が入り込んだ壁体には、積極的に緑化を施し、親水性に富んだ公園として解放する。
また強くなる運河幹線建設の歴史＝公園拡張部分の地下＝海底からライトアップを施し、壁とは異なる表情をつくりだす。



作品H 表題：「横浜・山下公園海側への拡張-A案」

所属：神奈川大学大学院

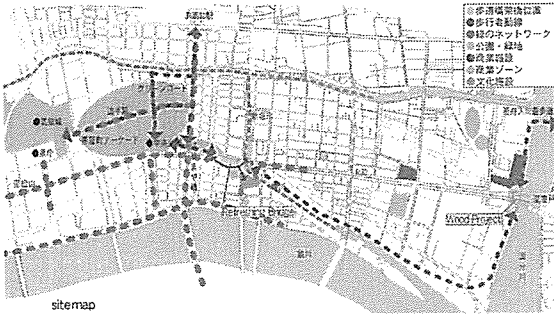
氏名：堀内寛晃、清水玲、永田誠、島尾真亮

好感度：「優」2、「良」0、「可」1

一言評価：*楽しい水辺空間で良い。

*山下公園からの景観が殺されかねない。

歩行者空間の創造
歩道橋のデザイン (REFRESHING BRIDGE)
高知工科大学
氏名 石川 眞理



歩行者動線
高知城、中央公園、はりまや橋公園を緑の拠点とし、シンボルロード（駅前線・R32）、追手筋、グリーンロード、東岸前通り、江の口川、鏡川、徳川・新徳川を緑の骨格軸として整備する高知市の計画に加え、Refreshing Bridge、Wood Projectの計画・設計によって提案される公園・緑地も緑の拠点となる。高知駅やバスターミナル等の交通拠点、商店街、公共施設、観光施設、観光拠点、緑の拠点を結ぶ歩行者ネットワークの回遊性を強化することは、21世紀の高知市の活性化につながる。緑豊かな歩行者空間は、良好な都市景観を形成する。この歩行者動線は、舟入川チームが計画・設計している歩行者動線と結びつく。

プロジェクト概要
本プロジェクトは、高知市内に点在する歴史的資源・観光資源を結び中心商業地と近隣商業地さらに、郊外型の店舗を結ぶ歩行者ネットワーク上に、より快適な歩行者空間を形成するために、2地点に歩道橋を設け、周辺整備も併せて行う。

- Refreshing Bridge：はりまや橋公園→文化プラザ→横徳公園を結ぶ歩道橋の新設
- Wood Project：基盤構造の固い区画と交差する歩道橋の架け替え
- 2歩道橋を計画・設計するにあたり、橋梁の意匠設計と部材計画のための簡単な構造計算を行う。

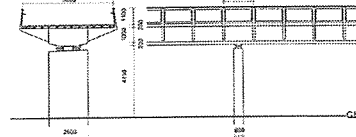
REFRESHING BRIDGE
本歩道橋の計画・設計の前提条件は、現在、高知市の中心市街地東側の形成に向けて進められている、九反田周辺地区、中横東周辺地区の整備事業の一つで、「土佐橋地区街なか再生事業」である。

架橋位置は高知市の中心部であり、周辺が雑然としているので、橋自体を、すっきりとしたデザインにするために、鋼製桁橋構造、側面はブラケットの持ち出しとし、スレンダネスを強調した。また、基礎はブラケットと一体化した鋼製支柱と強化ガラスを用いることにより、透明性を重視した。歩道橋自体には透明感を求めたが、はりまや橋側の階段、エレベーターは、ランドマーク的な存在となっており、木床板を採用し、トップレールおよび下段手すりも木製とすることで、木村立派としての高知らしさを、自然素材の柔らかさを取り出している。

本歩道橋の計画・設計にあたっては、単に歩行者動線を確保するだけでなく、長期的視野のもと、より良い都市空間の創造を目指し、周辺地区の総合的な整備を提案した。

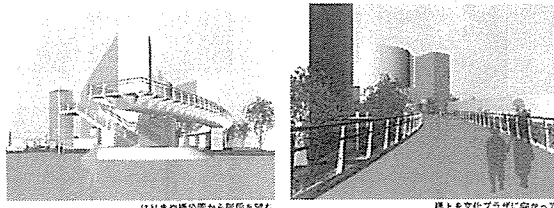
観光の拠点となるインフォメーションスポットを含んだ商業・基幹施設と住宅を持つ建物Aと、都市型高層商業交差点と集合住宅を持つ建物の二棟を建設した。設計範囲の既存建物のボリュームを新しく建設した建物に集約することにより、公開空間としての公園が整備された。

歩道橋は有効幅員6mを採り、建物と歩道橋の間に植樹することにより、緑のネットワークを結ぶ快適な歩行者空間が形成されている。橋を曲線橋としたことで、景色の変化を楽しめ、広々とした公園では、老若男女を問わず様々な人々が、心地よいひとときを過ごすことができる。

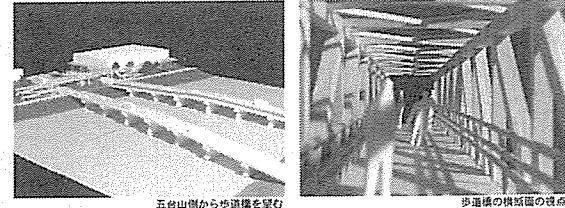


橋長 350m
全幅員 6.5m
1次梁有効数 2.3トピ
歩道橋 断面図・側面図

Wood Project (田中 肇)
基盤構造の固い分川右岸の現況歩道橋を木造(集成材)トラス橋に架け替える計画。周辺の堤防は埋やかなスパー堤防にして橋から川への相互の見通しを良好にし、五台山などの対岸からの眺めに対しても見晴らしのよいよう整備した。舟入川からの歩行者動線の流れが高知市内へと続く、歩行者ネットワークの一角を担う。

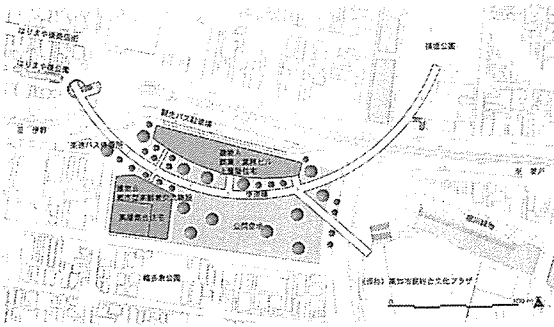


はりまや橋公園から階段を登り
橋上を文化プラザに向かって

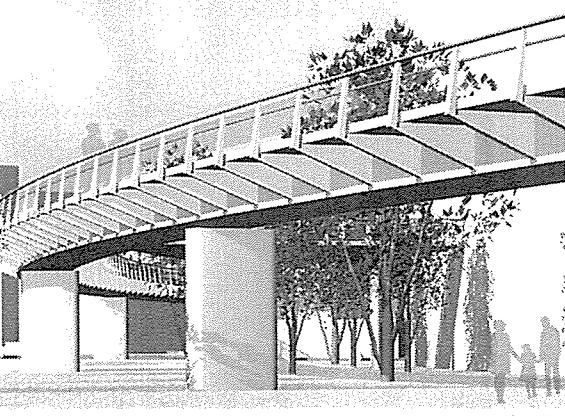


五台山側から歩道橋を望む
歩道橋の構造面の透視図

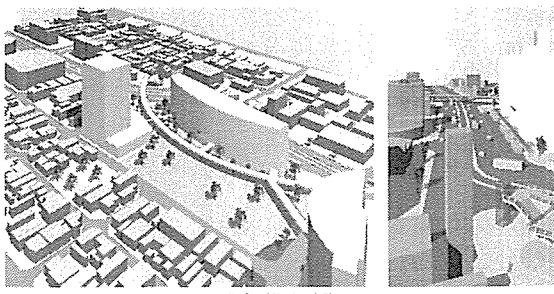
歩行者空間の創造
歩道橋のデザイン (REFRESHING BRIDGE)
高知工科大学
氏名 石川 眞理



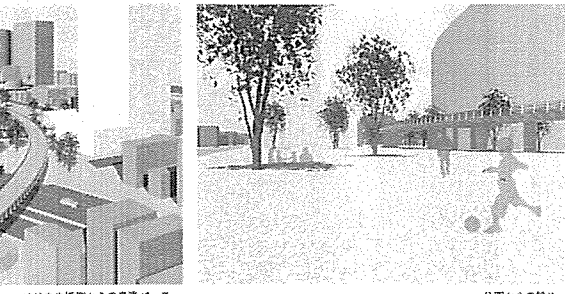
平面図



公園から見上げた歩道橋



文化プラザ側からの鳥瞰パース
はりまや橋側からの鳥瞰パース



公園からの眺め

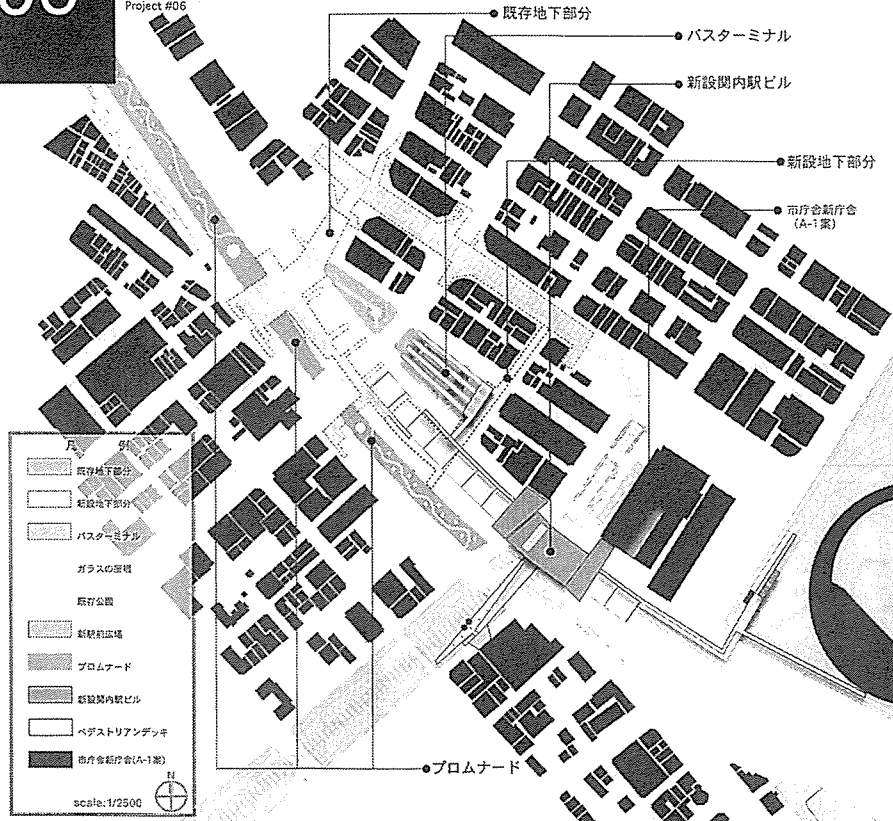
作品 | 表題：「歩道橋のデザイン」

所属：高知工科大学大学院
氏名：石川眞理

好感度：「優」2、「良」0、「可」0
一言評価：なし

06

関内駅プロムナード
Kannai Urban Double Ring
Project #06



関内駅プロムナード

・関内駅は関内の玄関口である。
横浜のオールドタウンの玄関口としての駅としては強みに欠ける。
駅の空間も、単に乗り降りするだけで、魅力に欠け特徴もない。

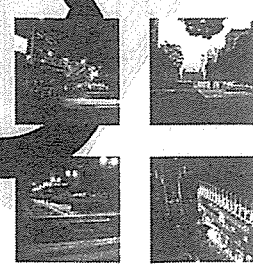
立地の考察

- ・東に横浜スタジアムがあり、駅からのアクセスは道路上の横断歩道を渡る不便さがある。
- ・南側に道沿 (山下・長津原線) と地下高速道路があり、南方面からのアクセスが弱い。
- ・馬車道、伊勢佐木町方面へのアクセスもマリナード地下街を利用することによって地上では道沿を横断しなければならぬ。
- ・横浜市の「緑の軸線構想」に、大通り公園から横浜公園、日本大通りを結ぶ山下公園に繋がるルートがあるが、関内駅周辺でスムーズな連絡ができない。

→以上の考察から

・駅と周辺地区及び周辺施設とのスムーズな連絡を回り新しい駅施設として関内のランドマークになる関内駅の提案を行う。

・横浜市庁舎及び教育文化センターとの連絡を、庁舎の新築や再開発に合わせて、バスターミナル・デッキ・連絡橋などで強化する。



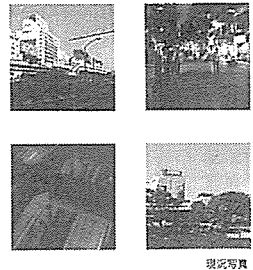
■B案 中、長期的な案

- ・南北 (大通り公園とくすのき広場) を結び、かつ情報交流空間をもつ駅のランドマークになるようにつくる。
- ・駅舎内には、観光施設や宿泊施設、イベントなどの情報サービス機能を充実させる。設置された情報端末や来訪者の携帯端末とを組み合わせ、市民レベルでの観光スポットを公開/更新できる場所をつくる。
- ・A案のペDESTリアンデッキを拡張し、横浜スタジアム及びくすのき広場、大通公園、イセガキモール、馬車道などの周辺地区とのスムーズな連絡を図る。
- ・現「セルテ」の立地する位置に、バスターミナル及びタクシープールを整備し、関内地区及び、周辺地区との交通ネットワークを強化する。
- ・地下高速道路に屋根をかけ、かつの運河を復元するという意味で水を引き込む。そして、換気塔をアート化し、光と風、そして水で演出されるプロムナードとして一般開放する。
これにより、大岡町/桜木町方面からのアクセスがスムーズになり、マリナード地下街及び関内駅 (浜/地下鉄) との連絡も容易になる。



大通公園から関内駅を見る

地下高速道路上のプロムナード



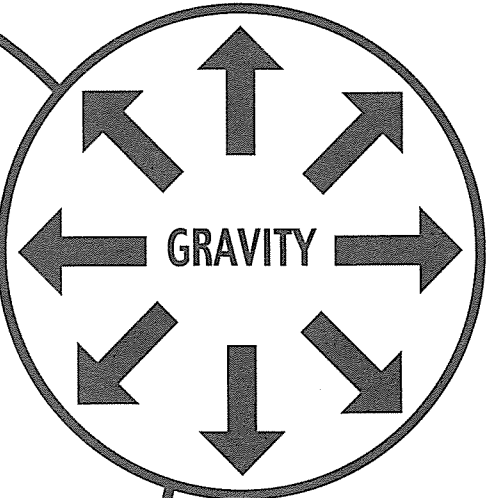
現況写真

作品J 表題: 「横浜・関内駅プロムナード」
所属: 神奈川大学大学院
氏名: 堀内寛晃、清水玲、永田誠、島尾真亮

好感度: 「優」1、「良」1、「可」0
一言評価: *潤いが欲しい。乾いた都市に。

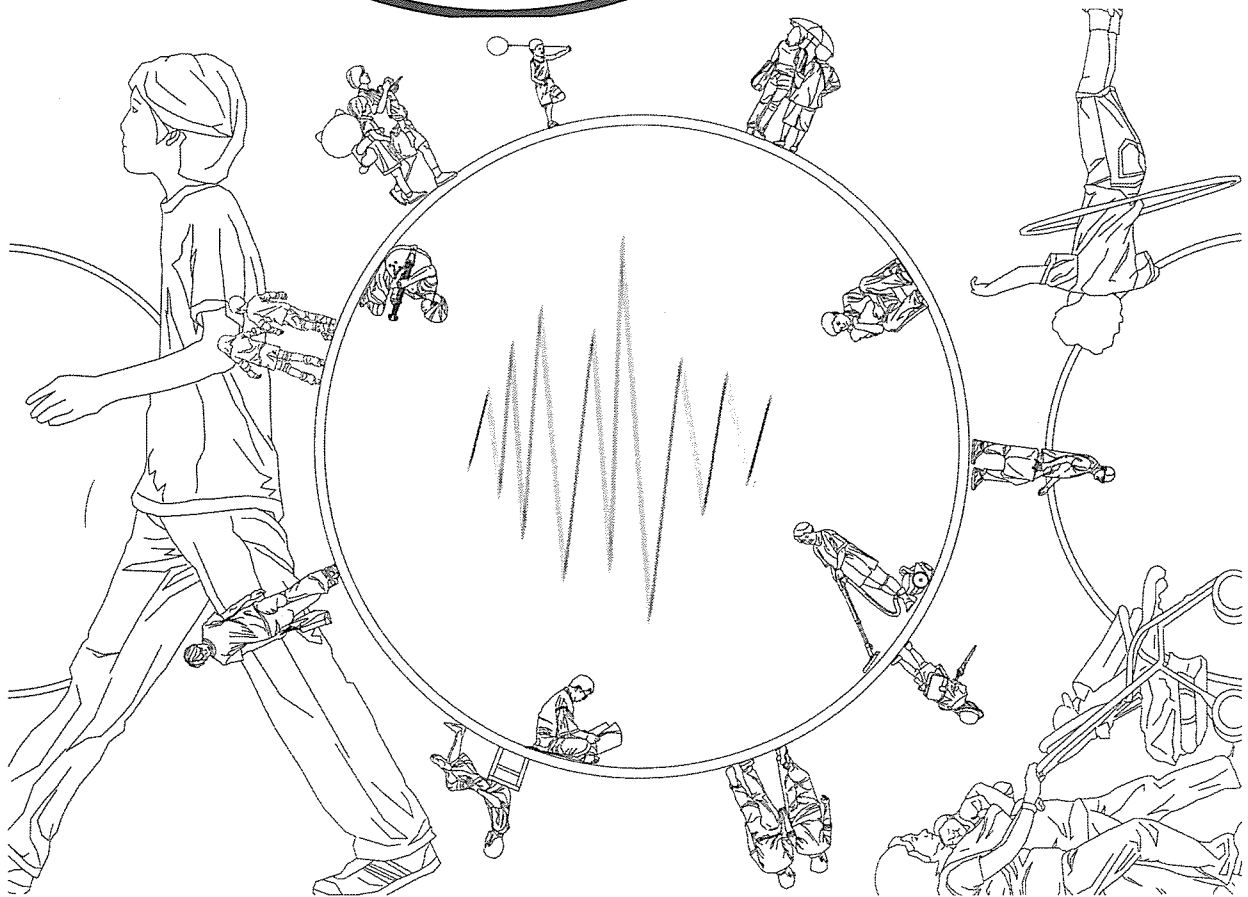
TA JU-RYOKU

球体は
大きいものから、小さいものまである。
公園、オフィス、商店、、、。
必要に応じて球体間を移動する。
いろいろな機能をもつ球体が、
無限のつながりをもって
ひろがっていく。



球体の内部表面を全て床面
とすることにより、広い面積を
得ることが、可能となる。

球体どうしはネットワークを持ち
それぞれ、分子構造のように結ばれている。



作品K

表題：「TA JU-RYOKU」

所属：武蔵野美術大学

氏名：鹿川晃治郎

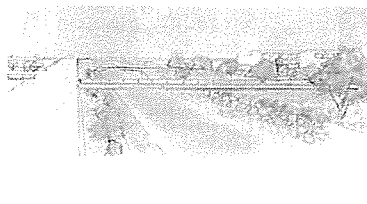
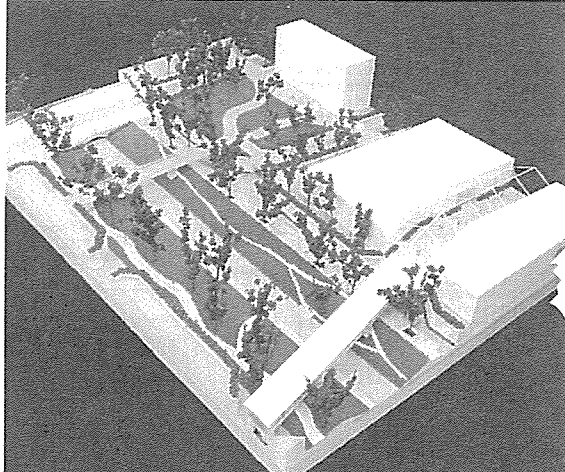
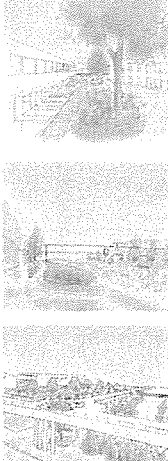
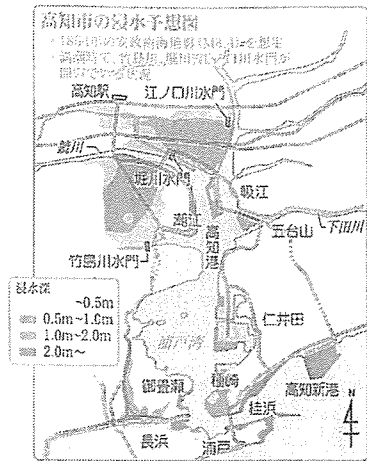
好感度：「優」1、「良」0、「可」1

一言評価：*面白いアイデアだが。

南海大地震に備えたまちづくり

高知工科大学

氏名 小八木雅典 塩見礼佳
白鳥秀彦 中塩愛子



南海地震に備えた防災まちづくり

氏名 小八木雅典 塩見礼佳
白鳥秀彦 中塩愛子

1. 設計意図
高知県は、南海地震をはじめ、台風による暴風雨、1998年の集中豪雨による災害など比較的被害の多い地域である。その中でも195年~150年周期で起きるとされている南海地震は、日本有数の大地震である。過去、記録に残っている8回の南海地震でも高知県は、被害による建物の倒壊、家屋による建物の倒壊、地盤の崩壊などによる被害の発生など、甚大な被害を受けている。

高知県は、次期（2030年~2050年）に起こるとされている南海地震による被害予測を「高知県地震対策推進委員会」でまとめている。それによる人的被害予測で高知県の死者数全体の合計は1,445人、負傷者数は4,674人であり、そのうち高知市の死者数は507人、負傷者は1,826人と他の地域に比べて被害が大きい。また、高知市は、高知市に行政機関等の重要な施設が集中しており、高知市に大きな被害があること、高知市全体の様々な機能が停止する恐れがある。

このような被害を完全に防ぐことは不可能であり、あまり、効果的な方法とは思えない。しかし、その被害を最小限に抑え、災害発生時に復旧、復興が行えるような自己回復能力を高めることは可能であり、そうした復旧、復興が行えるようなハードづくり、ソフトづくりが重要である。

高知市防災まちづくりの目的は、高知市を災害に強いまちにすることである。災害に強いまちとは、地震、火災、台風など多様な災害に対し、柔軟に対応できるまちのことである。その中で、高知市は、歴史、産業、観光、文化、自然などの宝を有している。高知市の特色や地域の特色を守りつつまちづくりを進めていく必要がある。今回は、これらから南海地震に備え、防災的に優れたまちはどうあるべきかを提案する。

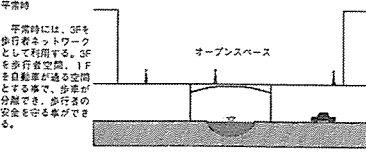
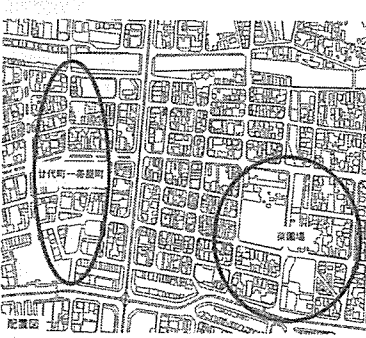
地震名	規模	発生日	M	被害概要
白鳥地震	6.4	11.29	8.4	建物の破壊、人命の死傷が多く、津波により土佐の田舎に被害が及ぶ。
—	8.7	8.26	8.6	近海に津波が襲来し、死者が多数出た。
—	10.99	2.22	8.0	津波被害甚大
—	13.51	8.3	8.4	津波被害甚大
阪神地震	16.55	2.3	7.9	大津波があり、横浜、甲府で死者続出。
宝水地震	17.07	10.28	8.4	死者1,644人、行方不明305人、津波の高さ20m
安芸南海地震	18.54	12.24	8.4	死者372人
南海地震	19.64	12.21	8.0	死者670人、行方不明者9人、負傷者1,836人、家屋の全半壊2,201棟以上。

表1. 過去の南海地震

2. 設計範囲
設計範囲として、また南海大地震の際、最も大きな被害を受けると予想される高知市の中心市街地を選定した。北と西を江ノ川、南を徳川、東を御用川に囲まれた地域であり、さらに、住居町一帯の地区、高知市の地区に設計範囲を絞り込む。その地区の特色に合った防災まちづくりを行うこととした。

2-1. 住居町一帯の設計範囲
設計範囲である住居町一帯は江ノ川沿いの高知市の中心市街地の一部である。この地区は、商業施設が多く、テナントビルが並び、商店街が形成されている。また、高知駅や高知市、はりまや橋など観光地が多く、週末も多くなり、多くの買い物客や観光客で賑わいをみせている。しかし、人が多く集まる場合は、災害時には大きな被害をもたらす場所になってしまう。こうした不特定多数の人が集まる場所、防災の観点からまちはどうあるべきかを考えるためにこの地区を設計範囲として選出した。

2-2. 商業圏
商業圏は、高知市の中心市街地から少し離れた場所に住宅や商店街、小学校、公園など様々な施設があるが、比較的高層ビルが立ち並ぶ地区である。ここでは、高知市にはお寺があり、江ノ川川から地蔵堂を築き、徳川と両岸に渡っている。また、住宅地では、幅広い年齢層の住人が暮らしており、その家路も様々である。このような特徴のある住宅地は、防災の観点から見れば、どうあるべきかを考えるためにこの地区を設計範囲として選出した。

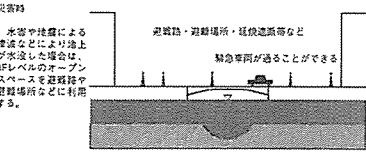


コンセプト図

3. コンセプト
高知市（住居町一帯の設計範囲）を軸とした都市でありながら、さらに、100年~150年周期で起きる南海地震に防災に備え、火災、水害など災害に強いまちづくりを提案し、実現させる。その具体的なコンセプトとして、1. 水害を軽減させる。2. ペDESTリアンシップで歩行者のネットワークをつくる。3. オープンスペースを確保するの3つを挙げる。

水害	火災	災害	歩行者
水害により津波が水浸した場合は、歩行者のネットワークを確保することにより、地上に降りて安全なことが出来る。また、歩行者のネットワークは、防災拠点となる歩行者のオープンスペースと結び、水害時には避難場所として使用する。	火災が起きた場合に、お寺の水を消防用水として使用する。お寺のオープンスペースと合わせて避難場所の確保を促す。	お寺周辺の公園は、災害時には緊急避難場所として使用する。また、お寺のオープンスペースと合わせて避難場所として使用する。	お寺のオープンスペースは、歩行者の安全な避難場所として使用する。また、歩行者のオープンスペースは、歩行者の安全な避難場所として使用する。

表2. コンセプト



コンセプト図

作品L 表題：「南海大地震に備えたまちづくり」
所属：高知工科大学大学院
氏名：中塩愛子
好感度：「優」0、「良」3、「可」0
一言評価：＊川の流れを直線よりも自然形に。

Communities Hub

CONCEPT

個々人の目的を結ぶところに成り立つコミュニティは、深い有機性を有した場々としては、それが向であるものを取り合ふことと見出し、彼々を束ねたコミュニティは彼々のものを結ぶために、コミュニティ機能を再構築しようとしている。

今日我々が抱えている管理を行うためには、空間を物理的に閉鎖する（CLOSE する）手法が優先されている。こうした閉鎖空間と管理の一体構造が、彼々から統一的なコミュニティ体感を穿つ空間的制約を産んでいる。

本提案では閉鎖空間と管理の一体構造を「オープン・クローズ空間」と呼ぶ。

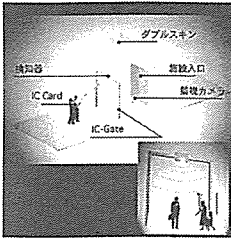
本提案ではその機能をエントランスから始める。

IC-Gate とは

IT 技術が空間にどのような可能性をもたらすのか、その一つの形を提示するものである。提案するモデルは、エントランスに設置して、IC-Gate がエントランス機能を分担する。従来の設計に代えて、目に見えない物理的制約を管理し、物理的な閉鎖は消滅、管理だけが残る。このことは物理的に閉鎖をオープンにしたままの管理を可能にするだろう。

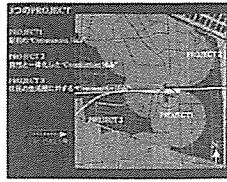
IC-Gate の提案によってコミュニティ階級における閉鎖空間と管理の一体構造という制約を解放する。コミュニティ階級は、地域に開かれた「扉」のようなイメージ、あるいは「広場」のような開放空間のイメージを取り戻す。

住民個々の利用を誘いながら、しかもそれを遮って凍結されるコミュニティ本来の機能もまた回復することが目的である。



Communities Hub の提案

ケーススタディに武蔵野市武蔵境駅周辺を取り上げる。空間提案において三つの具体的な PROJECT 展開を行う。提案するコミュニティ階級を、Communities Hub と称する。地域には階級の大小の Community が存在する。これらを一元的な階級においてまとめあげる中心、核となるのが、今回提案する Communities Hub であり、地域ネットワークの形成とこの Communities Hub である。



ムーバス (m-BUS)

目には見えない様々な Community を構成するのは地域性である。そして様々な Communities を連結し、活性化し、運動性にするのは、それを代表する住民自身である。そこで、地域を走るムーバスに注目したい。



これを、人々を Communities Hub に結びつける重要な物理的なネットワーク階級の一つとして注目する。

武蔵野市は、現在 17 の小さな区域に分けられたコミュニティセンターが存在している。将来的には武蔵境駅周辺に提案する 3 つの PROJECT とともに形成される 20 の Communities Hub をムーバスによってネットワーク化するものである。

PROJECT 1 駅前 Communitites Hub

主要用途：駅階級
特定の用途を結んであられるコミュニティ特性

- 1-1. 外部環境「駅階級のストリームに対する OPEN」
駅階級に存在する能力で、自由で、多様なベクトルをもった人のストリームを、その流れに準じたエントランスによって、そのがテンションも持ちつつ、階級内に引き込む。
- 1-2. 内部空間「階級のエントランスが導いた空間の自由度」
階級を管理する階級を軸に組織化され、拘束された空間構成は、一転して、空間の自由度を獲得する。IT によってもたらされた空間のオープン性が、固化した階級と空間との硬直した関係を解消する。



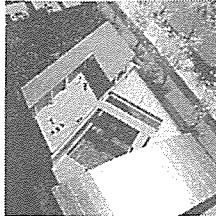
1-3. 内部空間「空間の可視化が生み出す開放空間」

オープン・スペースの中で、自然は段階的に可視化する。次第に開く階級。EV、外観に見えてくるスロープ。すべての階級が利用者の流れの中に入り、かつての閉鎖された階級から構成され、相互に結びついた階級はほどこない。

PROJECT 2 自然と一体化した Communitites Hub

主要用途：再構築/復興
特定の用途を結んであられるコミュニティ特性

- 2-1. 外部環境「自然と一体化した OPEN」
五洲上水降道と北村公園の緑の軸線を階級内部に引き込み、建屋と自然とのプロセスが生み出す。OPEN な空間構成を辿り出す。



2-2. 内部空間「建屋と自然とのスパイラル空間」

デッキとそれを結ぶスロープによって、建屋空間と自然空間のスパイラルが生まれる。交差によって、内部は外部化し、外部は内部化する。

2-3. 内部空間「階級・視界の交差」

階級内のスパイラルな人の動線とムーバスの動線、線の軸が交差するムーバスの動線に沿った水柱が軸の階級 Node になる。

PROJECT 3 住民生活圏に対する Communitites Hub

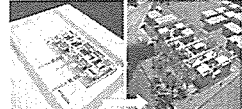
主要用途：福祉デリア
特定の用途を結んであられるコミュニティ特性

- 3-1. 外部環境「地域住民の生活圏に対する OPEN」
住宅街に形成された、地域住民の安定した生活圏の充実のために、IC ゲートの枠を敷き、一方で住民内部を OPEN にし、他方で外部階級を管理（CLOSE）する。
- 3-2. 内部空間「内部に人混み階級の上に階級階級」
従来の、自然生活には馴染みにくい階級階級と自然生活階級ともあて同じ平面上に設置し、IC-Gate によって階級を、組み込まれた安定した人混み階級の上に、新しい階級のあり方を築く。



3-3. 内部空間「ムーバスが階級の一部となる」

インフォメーションパネルの構成やベンチなどの高さの配置によってヒューマンスケールな空間をつくりだす。ムーバス自体が持つ独自のヒューマンスケールに着目し、約 6m グリッドのプランニングを行った。



- 3-4. ムーバスネットワーク
地域コミュニティの中心（Communities Hub）が物理的なネットワークとしてのムーバスによって結ばれている。

Communities Hub

CONCEPT IC-Gate Communities Hub m-BUS PROJECT

PROJECT 1 PROJECT 2 PROJECT 3

Communities Hub

武蔵野市武蔵境駅周辺を取り上げ、三つの具体的な PROJECT 展開を行う。

提案するコミュニティ階級を、Communities Hub と称する。地域には階級の大小の Community が存在する。これらを一元的な階級においてまとめあげる中心、核となるのが、今回提案する Communities Hub であり、地域ネットワークの形成とこの Communities Hub である。

地域を走るムーバスに着目し、人々を Communities Hub に結びつける重要な物理的なネットワーク階級の一つとして注目する。

RBS MAIL

3つのPROJECT

PROJECT 1 駅前のCommunitites Hub

PROJECT 2 自然と一体化したCommunitites Hub

PROJECT 3 住民の生活圏に対するCommunitites Hub

MUSASHI-SAKAI PROJECT

作品M 表題：「Communities Hub」

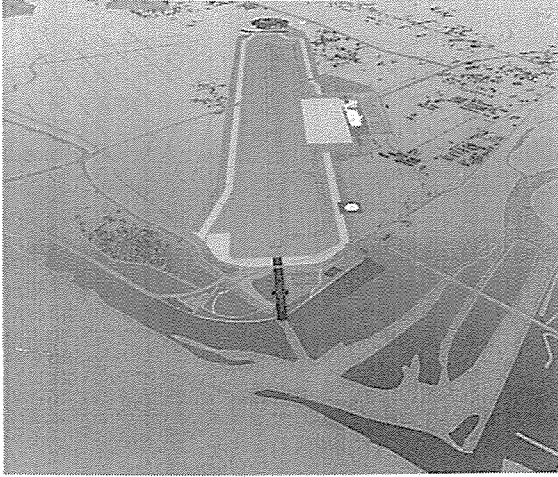
所属：工学院大学谷口研
氏名：鯉坂誠之

好感度：「優」1、「良」0、「可」0
一言評価：*何かをシンボライズする形象の重要さ。
それには心血を注ぐ覚悟が必要だと思ふ。

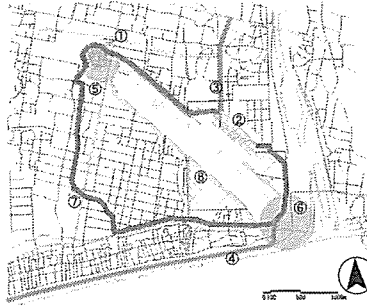
高知空港プロジェクト

高知工科大学

木村 宏 佐野 智子 夏目 憲作



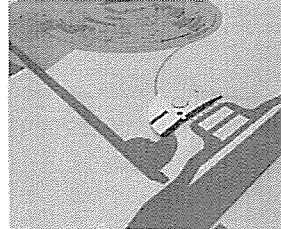
空港ターミナルビル



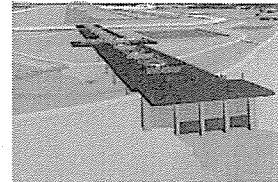
- ① 道の駅
- ② 空港ターミナルビル
- ③ アクセス道路
- ④ 新くろしおライン
- ⑤ 北公園
- ⑥ 緑の広場
- ⑦ サイクリングロード
- ⑧ 緩衝緑地



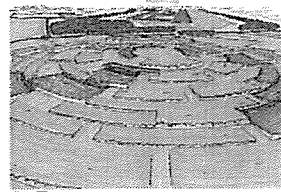
道の駅



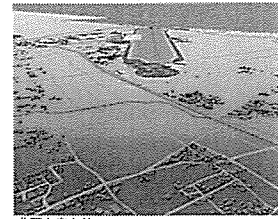
道の駅&北公園



緑の広場



北公園



北西上空より

高知空港プロジェクト

高知工科大学

氏名 木村 宏 佐野 智子 夏目 憲作

概要

高知空港の利用者数は増加の一途を辿っており、輸送力の強化が急務となっている。そこで高知県と運輸省では、高知空港拡張計画により旅客の50%増強等の整備を進めている。また、この計画とともに空港周辺では、「国道高知南回り道路」、「県道高知空港センター線」、「緩衝緑地整備計画」等の計画が進められている。

高知空港及び空港周辺の設計を行うにあたって、全体のコンセプトを「高知らしさを感じられるたまりの空間」とし、高知の玄関口にふさわしい空間、より多くの人が集まる空間を目指した。高知らしさの表現としては、航空機や土佐っ子気質から読み取れる「大きなスケール」を基本として、空港のスケール感を活かした設計を行う。また、たまりの空間の表現としては、空港を単なる移動のための施設としてではなく、長閑な感じしなくなるような魅力ある施設や景観を創出し、地域に貢献するとともに旅行者との交流の場となり、高知の魅力をさらに深めていく。

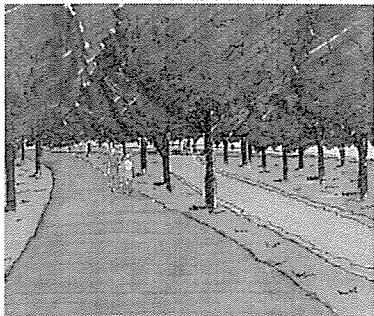


ターミナルビル（吹き抜け）

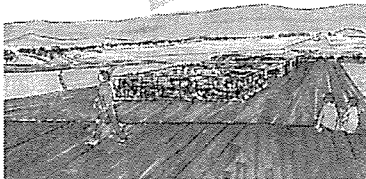
北公園



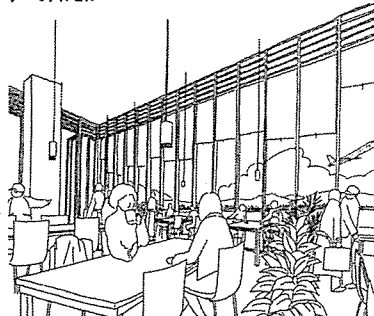
ターミナルビル



緩衝緑地



緑の広場（展望デッキより）



ターミナルビル（カフェテリアより）

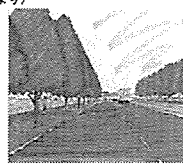
■空港周辺のランドスケープ
 空港周辺は、飛行機の乗客が唯一、空から眺めることが出来る場所である。また、空港は飛行機が離陸することから、周辺は規制により高層の建築物がない広い土地が存在する。この二つの特徴を活かすために「日常では体験することのできない大きなスケールの表現」というコンセプトの下、設計を行った。

■ターミナルビル
 ターミナルビル及びターミナルビル周辺の計画のコンセプトとして「高知らしさ」を感じられる景観づくりを目指した。「高知らしさ」を整理させるものとしては、海・広い空・田舎風景・山並み・森などが挙げられる。これら要素を活かした景観構成を行い、かつ空港の魅力を生かす空間を併せてターミナルビルの整備計画を検討する。

■道の駅
 空港周辺は田舎の素材が豊富にあり、空港の整備に伴って大規模な開発が行われ、道・建物が見つかっている。そこで、出土遺物の展示のため田舎の素材の資料館を提案する。この施設は、新設される自動車専用道路と歩行者専用道路に隣接する道の駅として計画した。建物はランドスケープと一体化を目指し、丘の一部のような形状になっている。薄い一枚の屋根の下ではさまざまな活動が行われており、道の駅の基本コンセプト「交流」を表している。



緑の広場



アクセス道路

作品N 表題：「高知空港プロジェクト」

所属：高知工科大学大学院

氏名：木村宏

好感度：「優」1、「良」0、「可」0

一言評価：*なし



■市庁舎計画
・現在の市庁舎は昭和34年（1959年）に建設された。
我が国の近現代史の1ページを飾る村野藤吾の作也。
・横浜市が発展、人口増加に伴い、軌道空間の不足を来たし、各部局が分散する事が余儀なくされている。
・近年、市庁舎移転の計画が相次ぎ、複数の候補地が取沙汰されている。
・しかし、中区は横浜市の中心地であり、中区以外に市庁舎を移転することは、横浜市の核そのものが動くことになり、駅周辺の諸機関、商業施設等も移転することになり、その影響は計り知れぬ大変い物となる。
・中心部の明き店舗、商業スペースが壊れることになる。
つまりは市内の経済活動を停滞させる原因となる。

→そのため現在の市庁舎の位置周辺に建て替える計画を提案する。
延床面積を190,000㎡とする

■A案
現市庁舎の駐車場部分、または市議会議場の位置に超高層ビルを計画する

■B案
横浜公園内、現横浜スタジアムを他に移設しその跡地を新庁舎用地とする
→横浜スタジアムの移転先として、新山下地区又は本牧地区とする

<理由>
M21線の利用率を上げるため、朝夕の通勤利用の片寄りを防ぎ、上り、下りの利用率を上げる

- (例) ・緊急危険の宝塚球場
- ・副都鉄道の横浜球場

→横浜公園が減る分を山下埠頭に新しく公園をつくる。

■フレキシブルインフィル
所用床面積の変化に対応するため、増築、間取りの変更等ができる構造とする。
現状のタコ足的部屋配置のフレキシビリティと、非効率さを同時に解決できる建築。

■高層換気元
くすのき広場、横浜公園に面する部分は、公団空地とし、高層の圧迫感をやわらげる。
一般市民へのインフォメーションスペースとする。

■市民広場
上層部に市民活動のためのスペースを設ける。
レンタルルーム
チャペル
小ホール etc.
横浜を一望できる場所を、市民に開放されたものとする。

■現庁舎のリサイクル
村野藤吾設計の現庁舎の、本館部分を再生し、利用し都市の記憶、連続性に配慮する。

■壁面緑化
近隣の公園に配慮し、壁面緑化を行う。
ビル内の環境調整に役立つものとする。

■計画地概要

建築率	80%
容積率	80%
市庁舎前面街づくり協議地区	

■敷地面積 (現庁舎) 19,619㎡
現庁舎建築面積 4,438.1㎡
延床面積 28,281.4㎡

■計画建築総床面積 160,000㎡
うち現庁舎活用分 23,000㎡
高層換気床面積 約 170,000㎡

■高層換気概要

建築面積	約 2400㎡
階数	約 60階
短手方向幅	約 40m
長手方向幅	約 60m

作品O

表題：「横浜・市庁舎計画—A案」

所属：神奈川大学大学院
氏名：堀内寛晃、清水玲、永田誠、島尾真亮

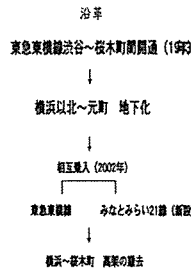
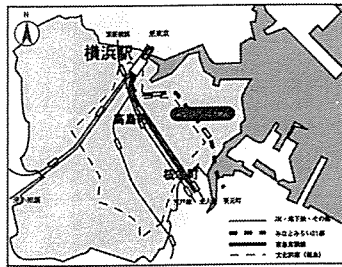
好感度：「優」0、「良」1、「可」0
一言評価：*エコロジカルな建築か？

横浜/鉄道高架再利用計画 Promenade Garden Sakuragicho

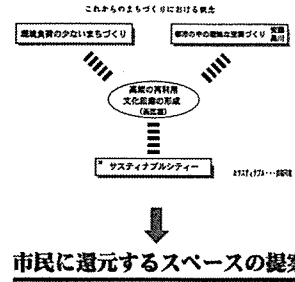
2002年東急東横線の高架(高島町~桜木町)は、その役目を60年目を迎えて終えます。残すのは高架のみが残り、活かす方法も考えてみませんか。

またこの近辺が日本の鉄道の発祥の地ということから、歴史的に見ても価値があると思われれます。

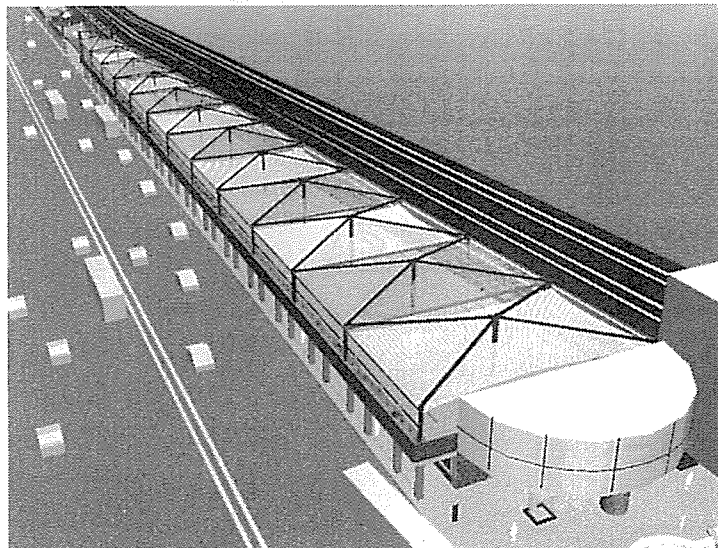
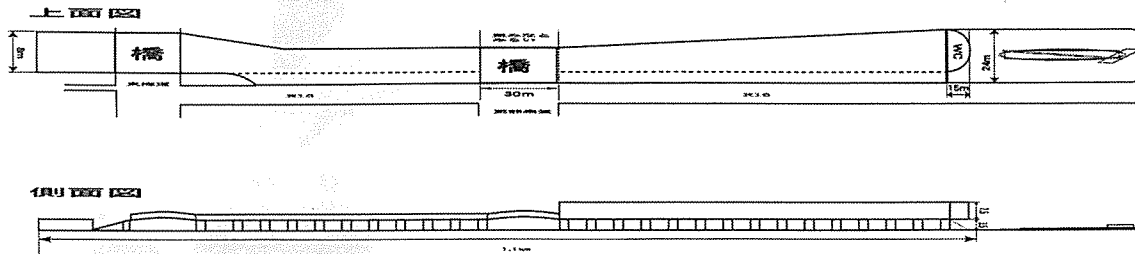
この案を通じて今まさに街から失われつつある何かを取り戻すべく、提案したいと思えます。



コンセプト



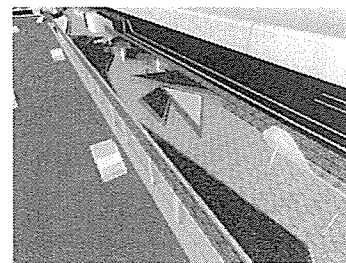
略図



東急旧桜木町駅



プラットフォームはオープンスペースとして



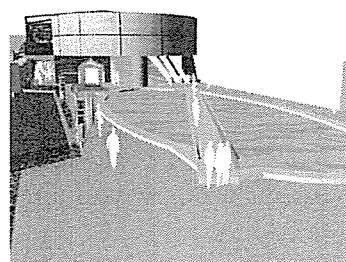
軌道跡は市民菜園として還元



高架下は市民図書館またはギャラリーとして活用



上下間の移動はエスカレーターでスムーズに



コンコースは親水空間として

作品P

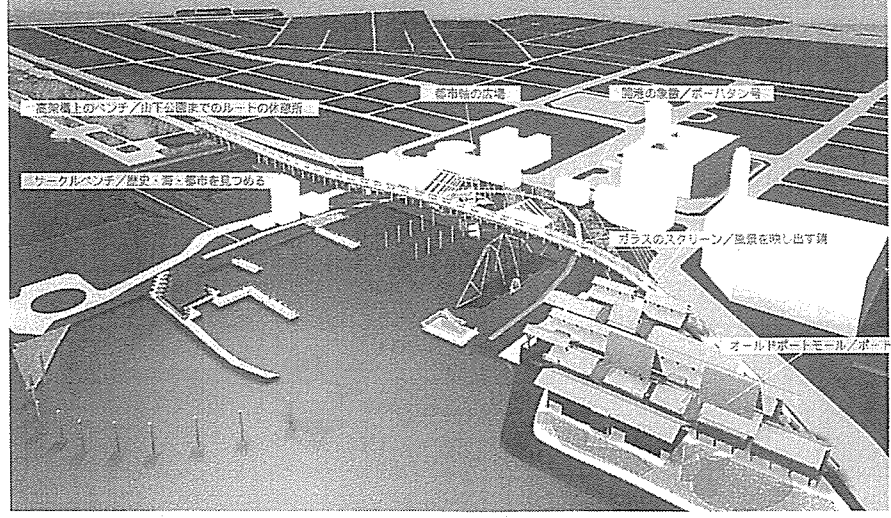
表題：「横浜・鉄道高架再利用計画」

所属：女子美術大学大学院
氏名：佐藤慎一郎

好感度：「優」0、「良」0、「可」1
一言評価：*夢がある。

01

象の鼻軸線広場
Kamama Urban Double Ring
Project #01



高架橋上のベンチ/山下公園までのルートが休憩所

都市軸の広場

開港の象鼻/ポードラム

ベンチ/歴史・河・都市を見つめる

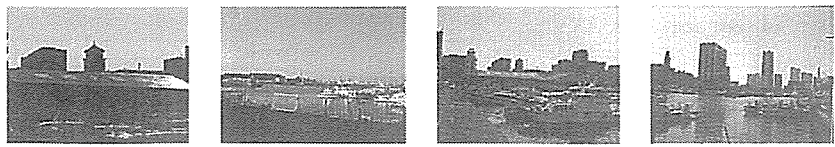
ガラスのスクリーン/風景を映し出す鏡

ポールドポードモール/ポードミュージアム

■象の鼻地区軸線広場

- ・横浜の最初の港である象の鼻突堤を再現する。
- ・倉庫群を再利用し、広場として再生を図る。
- ・日本大通からの軸線を意識する
- ・日米共同で黒船を復元し、整備する
- ・日米通商のシンボル、文明開化のシンボルとなる。
- ・高架橋は、新港埠頭地区から山下公園を結ぶ歩行者デッキとして安全しより楽しい活用を図る。
 - ・展望できるようなベンチの設置
 - ・デッキの中央部に断続的にガラスの風除けスクリーンを設置。
 - ・プランターや花壇を設置して緑いをもたせ、緑のベルトを強調する
- ・当地区と新港埠頭との間の三角形の部分は、港と船の（ポードミュージアム）博物館、及び日コハマスカーフを中心とする日コハマファッションの店や、飲食の店を置く

現況
往時のミナトの雰囲気を残す、静けさを保った場所になっている。



13

横浜港都市軸
Yokohama Urban Axis

CITY OF YOKOHAMA



■横浜港都市軸

- 日本大通りの延長線上、象の鼻地区沖に浮島、「フローティングアイランド」を設置する。
- 線の軸線構想、開港シンボル軸をさらに延伸した、ヴィジュアルアクシス=視覚的軸線としての横浜ミナト軸を整備する。
- 横浜港の海上のほぼ中心に位置し、360°の横浜のエレベーションを見渡せる展望空間などのスペースをつくる
- 開内エリアだけでなく、横浜全体の新しいシンボルとなり、開内地区再生のひとつの契機ともなる。
- シーバスタードの整備に合わせ、中継地点となるようなシーバスターミナルも将来的に計画する。

等尺出典：
横浜の街づくり
PLAN FOR YOKOHAMA
1991年 横浜府政庁計画部

作品Q

表題：「横浜・横浜港都市軸+象の鼻軸線広場」

所属：神奈川大学大学院
氏名：堀内寛晃、清水玲、
永田誠、島尾真亮

好感度：「優」0、「良」0、「可」0
一言評価：*なし

第11期定例総会

伊藤 登
ITOH NOBORU
代表幹事

㈱プランニングネットワーク

■7月14日（土）、10：30～12：30、品川区天王洲アイル地区MIビル25階会議室において第11期定例総会が開催された。出席者56名に、有効委任状220通を加えて総数276名の参加があった。出席者数は、定例総会開催に必要な総会員数500人（権利停止中の会員6名を除く）の3分の1の定足数である167名、規約改正に必要な総会員数の2分の1の定足数である251名を超え、総会は成立した。

■第1号議案では、代表幹事、各委員会委員長及びブロック幹事より第10期の活動及び収支報告があり、承認された。委員会活動では、JUDINEWSのJUDIへの名称変更、10周年記念事業に関わる諸活動、都市環境デザインガイドブックの雑誌への掲載と編集活動、公共空間実態利用調査、ホームページの開設等についての報告がなされた。

また、地方ブロックにおいては、JUDI賞関連の活動並びに公共空間実態利用調査、ブロック間活動の試みなど、より多様な社会的活動が活性化されたことが報告された。第10期収支報告については、10周年記念事業寄付641,000円を今年度積立金に計上することが報告されるとともに、この収支報告が資料の通り相違ないことが監査役より報告された。

■第2号議案では、代表幹事、各委員会委員長、各ブロック幹事より第11期活動計画及び予算計画の提案があり、承認された。第11期の活動方針としては、①本会の特色を活かした活動の充実、②対社会的な情報発信と交流の促進、③組織運営の改善、④財政基盤の強化などが提案された。またこの中で、若手会員の積極的な参加による多世代型の運営組織の形成、ブロックの主体性の確立と活動拠点（都市）の形成、ブロックの枠を超えた活動の推進体制づくり、インターネットの有効活用等が報告された。委員会としては、10周年特別委員会がJUDI賞委員会として新たに常設の委員会組織となった。

■第3号議案では、多世代型の運営組織の形成を図るために、規約の見直しを行い、正会員（従来の会員）に加え、総会における議決権を持たない準会員、学生会員を新たに加えることが提案され、了承された。また、ブロック帰属問題についてもあわせて討議され、「活動している地域や出身地等希望によってブロックを決めることができるようにする」ことを再度徹底することとなった。

■報告事項として、外部からの受託・共同事業については、特別（研究）委員会を組織し、その事業にあたることを基本とすることが代表幹事会より報告された。これは、トップダウンの形で決定し、一部の会員に大きな負担が生じないようにするための措置である。

その他、自由討議のテーマとして、①受託、共同事業のテーマ内容について②NPO法人化について③ブロック幹事会のあり方、等について提示したが、必ずしも十分な討議時間をとることができなかった。このうち、②については現段階ではあまりメリットがないことが確認された。またその他については、インターネット等を活用して継続的に検討していくこととなった。



定例総会の様子

■パネルディスカッション -街づくりから街づかいへ-

中野 恒明
NAKANO TSUNEAKI
事業委員会委員長

(株)アブル総合計画事務所

■JUDI第12回総会時イベント報告1ーパ ネルディスカッション

「街づくりから街づかいへ-各地の公共空間の利用実態」開催、7月14日総会当日、13時30分よりMIビル25階会議室にてパネルディスカッション「街づくりから街づかいへ-各地の公共空間の利用実態」を開催しました。これは昨年秋より、財団法人都市づくりパブリックデザインセンター(udc)とJUDIの公共空間活用の事例調査に関する共同調査の中間発表を兼ねて、パネラーとして、辻井順(北海道)、成瀬恵宏(関東)、澤木昌典(関西)、宮迫勇次(中国)、玉田孝二(九州)の5氏を迎え、コーディネーター役の加藤源氏(事業委員)の進行によって、各地の活用事例の発表、意見交換を行いました。

公共空間を舞台とした、オープンカフェやビアガーデン、屋台、仮設の店舗や納涼床、駐輪場などがスライド、OHPなどで

プレゼンテーションされる中で、活用の経過、官民の役割分担とりわけ地域の実行組織、NPO、TMO、などの存在、関係法例の制約を克服してきた話などの解説、それを受けて会場からも声も盛り上がりを見せて中、予定時間の2時間を若干オーバーして閉会しました。地域でのゲリラ的な活動が次第に全国規模で連携し、そしてグローバルな「環境」の時代の中での都心の再生、ハードからソフトへ、「街づかい」への大きな潮流の気配を感じさせられる時間だったと思います。協力いただいた方々に謝意を表します。

なお、同調査は9月中に報告書を作成しますが、この活動は幾つかのブロックで継続して行われることを確認されています。来年もこのテーマに沿った企画、とりわけ「街づかい」の主体となる市民の方々を招聘する方向で準備を進めたいと思っています。

■モニターメッセ

井上 正良
INOUE MASAYOSHI
事業委員会委員モニターメッセ
・懇親会担当

(株)アーバンデザインコンサル
タント

■2001都市環境デザイン・モニターメ ッセ・レビュー開催される

総会当日の7月14日、15:45より約3時間MIビル25階会議室にて「2001都市環境デザイン・モニターメッセ」を開催しました。

参加申し込みをお願いしたスタート時点は、応募企業が少なく心配しましたが、最終的には、20分枠の申し入れを10分枠への変更をお願いしたのも含めて、13社の参加を得ることが出来ました。

これも、会場の全参加者(今回は、56名の会員の参加がありました)が記入するアンケート表をまとめた報告書が、参加したメーカーや施工会社にとって、有用な資料であるという一定の評価が定着してきた賜物だと会員諸氏の協力で改めて感謝する次第です。

更に、今回のメッセで特筆すべき状況として、企業各社のプレゼンテーションが喚

起したホットな議論が上げられます。『人にやさしい』『エコロジーに配慮した』『ユニバーサルデザイン』等、製品開発や技術開発の因って立つ根拠として示されたコンセプトと製品・技術の関連性に対していくつかの問題提起がなされました。

その原因として、参加企業各社に共通して、ユーザーに商品を売り込むためには上記のようなコンセプトが不可欠であるという危機感があることと、ともすれば、このような言葉が安易に使われている事が多いという状況が考えられます。

専門家としての私達会員も、より厳密に言葉の内容を吟味することと、それを適切に社会に発信していく努力が必要だということを実感させられた出来事でありました。

メッセ後の懇親会は、39名の会員と47名の参加企業社員の参加を得て、活発なコミュニケーションと協働への模索等を含めて、楽しいパーティーであったことを報告いたします。

■関東ブロック

伊藤 洋

ITOH YO

関東ブロック運営委員

(株)CAU・プランニング

今年の夏の視察会は、「横浜・公共空間の多目的活用事例から学ぶ」と題して、横浜の野毛・伊勢佐木町・中華街・山手から新港地区・MM21を巡り、鶴見駅西口までを歩きました。

定例総会後のシンポジウムは、都市環境デザイン会議と(財)都市づくりパブリックデザインセンターが共同で行った「公共空間利用実態調査」をふまえて行われ、従来、主にハードに向けられていた都市環境デザインの関心が、ソフトにもシフトしてきていることを、はっきり認識できる機会でした。

横浜は徹底した都市デザインの追求と成果で知られていますが、今回はそうして作られてきている新旧の街や街角・街のコーナーがどう利用されているか、それを可能にしている法や制度、それを実現した市民や組織・行政の関わりなどを探ることがテーマでした。

「法規制・管理・慣例等から規制された公共空間の活用 そのアイデアは? 使用許可は?」

7月15日、空は青く、晴れわたり、暑く暑く、盛夏を満喫する1日でした。参加者は、23名。多くはありませんが、大阪・名古屋・金沢からの参加を得て熱心で、それこそ「熱い」視察ができたと思います。コースは2つ設定し、Aコースは、野毛町・福富町・イセザキモール・馬車道・北仲通り・新港地区・MM21地区、Bコースは、中華街・元町・山手・山下公園からシーバスに乗船し、MM21地区とまわり、両コースとも最後は鶴見駅西口へ、という内容でした。

○野毛通り 毎年4月大道芸を実施。今年は、会場をMM21地区、新港地区にまで広まり、81組が出演。野毛町の有志による実行委員会が警察署から道路使用許可を得ている。

○イセザキモール 昭和初頭にもホコテンを行っていたといわれる伊勢佐木町で、地元商店街が道交法により24時間の歩行者専用のショッピングモールに。(1977年) 歩車

道の段差をなくし、歩道上のアーケードを撤去など。代表的なフルモール

○馬車道 同様に地元商店街が通りをトランジットモールに。完成以来、商店街の環境整備の典型・お手本とされてきている。今年は秋から、イギリス調のガーデンストリートに向けてリニューアル工事着工の予定。

○赤レンガ倉庫・赤レンガパーク 新港地区のシンボル。保存が決まったあと、市民や団体が様々なイベントを行い利用してきたが、今年度、催事場・レストランへの改修工事中。

○汽車道 臨港線(貨物線)跡地を活用した散策路。緩傾斜護岸やトラス橋などの歴史的資産を活かし、シーブルー事業(既直面の撤去・覆砂により水質改善と生物相の回復)の区域を楽しみながら歩くことができる。

○山手234番館 1927年頃、建設された外国人向けの共同住宅(アパートメントハウス)。1989年横浜市が取得。1997年から建物の保全改修工事を行うとともに、中区パートナーシップ指針モデル事業として、市民と建物の活用方法について検討を重ねた。1999年から学識経験者や地域の人々、市民団体の代表からなる「山手234番館運営委員会」によって運営され、展示会・会合に利用されている。

○グランモールの大道芸 MM21地区、ランドマークタワーの足元で行われている大道芸。特に市や地権者が誘致したものではない。敷地は公園区域で管理者協議が必要な地区であるが、協議は行っていない。

○鶴見駅西口オープンカフェ 鶴見区のパートナーシップ事業の中で発案され、ワークショップなどを経て育てられてきた事業の1つ。鶴見駅西口デッキ・広場周辺の運営管理協議会が母胎となった、オープンカフェ協議会(市民・商店街が参加)が主催、多くのボランティアが支え、鶴見区も後援。毎月2回、日曜日開催。地元高校生や主婦の趣味の会など様々な市民が参加している。

■中国ブロック

長沼 眞智子

NAGANUMA MACHIKO

中国ブロック幹事

エル・グレコ

■中国ブロック 八月例会

場所 とん平(倉敷市阿知)

日時 2001年8月4日18:30~21:00

出席者 井ノ上、松波、金谷、藤本、亀谷、伊藤、長沼

報告事項 1. 第11回定例総会報告
2. 公共空間利用調査結果報告

協議事項 1. 2001年度予算
2. 2001年度事業計画
3. 「造景」編集の件

決議事項

1. 2001年度予算については、幹事長沼より提案説明があり、承認された。
2. 2001年度事業計画については、会員増強、収益事業などの具体的な提案がなされたが、承認、決定までには至らなかった。

「造景」編集については各県ごとの担当者を決め、具体的なテーマをきめ、作業に入る方向で進めることとした。

1. 新会員の紹介

2000年5月1日～6月30日の入会者は下記の通りです。(入会順、敬称略)

6月30日現在の会員数は、506名です。

氏名	勤務先
吉田 昌弘 高橋 泉 篠原 祥	(株)日本開発研究所三重 Architecture@ism 大阪ガス(株)

2. 退会者(2000年3月～4月)

五十嵐徹、稲川良道、大隅驍子、大塚洋明、笠井一八、加藤鎌一、斉藤邦彦、田中保士、中井和子、黛卓郎、キャロル・マンク、森義純、森本幸裕、山本誠、渡邊浩一郎(敬称略)

3. 住所変更等(敬称略)

氏名	変更内容(新)
内山 興亜	(株)感覚都市研究所 〒101-0062 千代田区神田駿河台3-3-11-4F Tel. 03-5282-5431 Fax03-5282-5432
栗原 裕	(有)ユー・プラネット 〒111-0043 台東区駒形1-5-6金井ビル Tel. 03-3847-3555 Fax03-3847-3375
野口 和裕	(株)積水樹脂技術研究所 〒520-2596 滋賀県蒲生郡竜王町大字鏡谷田731-1 Tel. 0748-58-2488 Fax0748-58-2486

4. 会員名簿

2001年度会員名簿ができましたので、会員の皆様に配布いたします。2001年5月末のデータですので、変更や訂正がある場合は事務局へご連絡ください。

編集後記

5月の編集会議で2001年のテーマが「会員の参加」「若い世代を取り込もう」と決まり、本61号担当と言う事で今回の企画をだし幹事会にも承認していただき、実施に動きまわりました。参加依頼状を郵送とFAXで70通ほど送り、だめ押しの電話も掛け総会前日には17案も集まり、「短い期間で、よく集まった」と感激しました。

展示したJUDI総会、モニターメッセ、懇親会の会場では多くの参加者に色々な意見をいただき、好評でした。

この誌面で応募された会員および学生さんに無理な御願いを快く受けていただいたこと、そして素敵なお話を改めて感謝するしだいです。(中嶋 猛夫)

この企画を立てたとき、まずは担当者が率先して作品を出そう、という話になりましたが、結局私はパス。締めきりが近づいても応募作品がなかなか集まらず心苦しい思いをしていたところ、17も集まったことを知りました。中嶋会員の尽力の賜物以外の何ものでもありません。またパネルの制作も搬入もほとんど中嶋会員にやっていただきました。

例年、殺風景な総会会場に今年はこれら作品が並べられ、反響も大きくて予想以上の成果だったと感じています。応募くださった皆さま、一生懸命コメントを考えてくださった参加者の皆さま。ありがとうございました。(松村 みち子)

広報・出版委員会

澤木 俊岡	石崎 均
土田 旭	伊藤 光造
近田 玲子	清水 泰博
菅 孝能	河本 一行
中嶋 猛夫	森川 稔
櫻井 淳	横山あおい
松村みち子	吉田 慎悟
白濱 力	作山 康